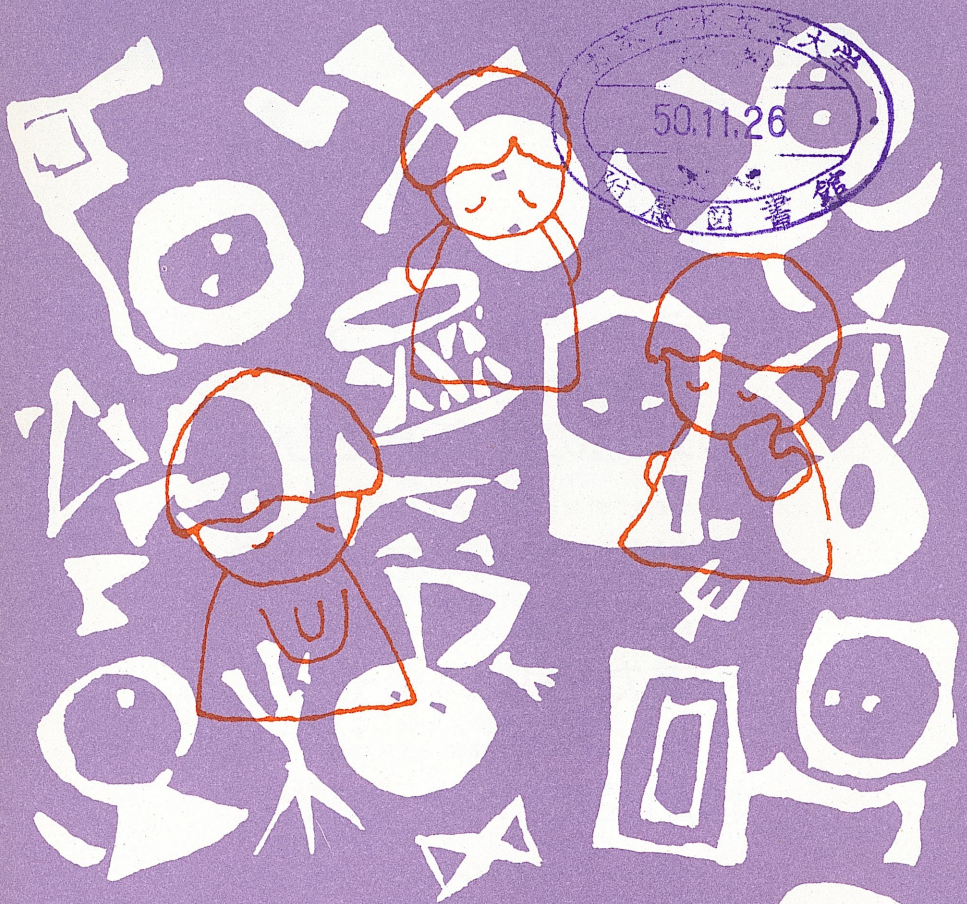


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育



昭和五十年十二月一日発行 毎月一回一日発行 昭和二十三年四月十五日第三種郵便物認可 日本国鉄道特別扱承認誌第六八三号 幼児の教育 第七十四卷 第十二号

第七十四卷 第十二号 日本幼稚園協会

12





保育者のための

# 保育実技シリーズ

日々の保育指導にすぐ役立ちます



## ① うたであそぼう

中村 明・早川史郎・関口 準 共著 B5判・128頁 1,000円

## ② 幼児の体育あそび 1

マット・ボール編

三宅照子著 B5判・120頁 1,000円

## ③ 幼児の体育あそび 2

なわ・平均台・とび箱編

三宅照子著 B5判・128頁 1,000円

## ④ あたらしいあそび

幼児の安全能力を育てるために

幼児の安全保育研究会編著 B5判・132頁 1,000円

## ⑤ 幼児のリズムあそび

フォークダンス・わらべうた編

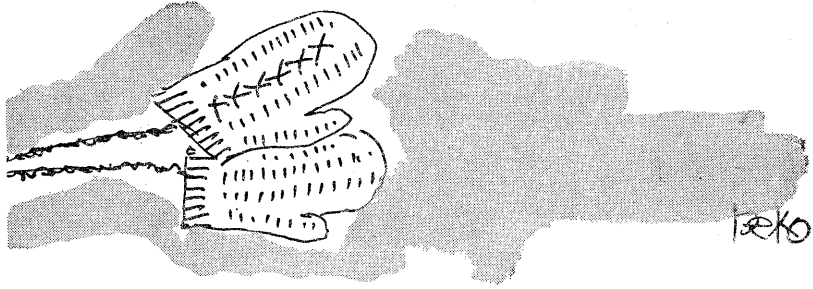
日本フォークダンス連盟編 B5判・132頁 1,000円

(以下続刊)

# 幼児の教育

第七十四卷 第十二号





幼児の教育 目次

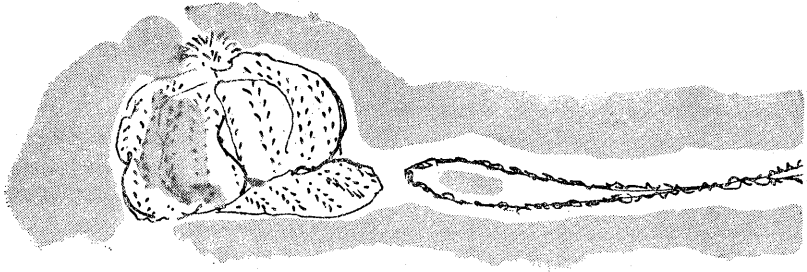
——第七十四卷 十二月号——

表紙 三好碩也  
 カット 中島英子

©1975  
 日本幼稚園協会

くりかえし	外山滋比古	(4)
くりかえし	高木良子	(6)
幼児教育に“ゆとり”と“ゆめ”と“ゆたかさ”を	松隈玲子	(8)
私の幼児教育論Ⅺ 保育の基本(十二)	神沢良輔	(12)
くりかえし	森下博三	(16)
くりかえし	関治子	(18)
私の保育“かたまり”つくり	飯島俊勝	(20)





★講演

海辺の生物―葉山海岸芝崎の浜辺にて―	酒井 恒	(25)
自分への宿題	松永 伍一	(31)
幼児の供述心理(その二)	池田 義徳	(34)
幼児の遊びに働く認知機能の条件分析的研究(その二)	利島 保	(40)
最近の本から	津守 真	(46)
橋詰良一著「家なき幼稚園の主張と実際」より(十三)		(48)
「それぞれの子どもらしさを求めて」より(四)		(56)
第七十四卷総目録		(61)

## くりかえし

外山滋比古

童話、おとぎ話の特色を考えているうちに三回のくりかえしの意味を「発見」して興奮したことがある。もうかれこれ二昔前のことになる。

桃太郎がキビダンゴを与える。サル、キジ、イヌと同じことを三度くりかえす。こういう三回のくりかえしが、古い話には多く見られる。外国の神話、民話にもある。これはよほど深い意味が秘められているに違いないと思ったのが問題に興味をもつようになったきっかけである。

拾ってきたイヌに、ボチを逆にしたチポという名をつけたとしよう。この変な名前ははじめなんだか落着かない感じを与えるかもしれない。家族で異議をとなえるものが出たりすることも考えられるが、やがて、何となく「なれ」てしまつて、変に思わなくなる。そればかりか、チポという名前に何ともいわれない情愛がこもっているような気がしてくる。

人間ばかりではなく、イヌにも名前が通じて、この名で呼ばば尻尾をふつてやってくる。チポは人間だけでなく動物にとつても「意味」をもつようになるのだ。しかし、だれにでも通じ

る意味ではないのも事実で、知らない人には何のことかさっぱりである。つまり、くりかえし、くりかえし、使っている人たちの間でのみ、記号は意味をもつようになるというわけだ。

ことばの意味はすべてこうして生じるもので、ことばの中にはじめから意味がそなわっているわけではない。

ハレンチはもともと恥知らずなことの意味で用いられていたことばだが、先年から若者の間で、カッコイイ意味で使われるようになった。文法家などは「誤つて」使われるようになった、と言っているようだが、ことばの意味がくりかえしで出来るものである以上、くりかえされた用法がつくり上げる意味がこれまでとは違っているからといって、これを誤りと断定することはだれにもできない道理である。

人間の文化はすべて、くりかえしを基礎にもっているようだが、ことばはその典型である。ハレンチをカッコイイというつもりでだれが使い出したかわからない。はじめのうちはカッコイイ意味では伝わらなかったであろう。それがくりかえされていくうちに、何となくわかる人がふえた。言語学で言うところの慣



用ができたのである。慣用の確立したものには意味ができる。意味のあるものが価値をつくり、その価値の網状組織の上にその社会の文化が発達する。くりかえしを外れて人間文化はあり得ないと言つてよい。

赤ん坊がことばを覚えるのは、慣用づくりの初の経験として注目する必要がある。どんなに頭のいい赤ちゃんでも、生まれつきのとき一度きいただけのことばを覚えることはできない。何度も何度もくりかえしているうちに、やがて、あるいは、突然にことばがわかるようになる。

大人はくりかえしを退屈だと思ふことが多い。同じことを何度も言ふと、うるさい、と感じる。なるべく、あっさり、しようということになるわけだが、このやり方を子どもにあてはめては、子どもが迷惑する。子どもは大人のように、くりかえしをうるさいと思つていない。それはかりか、むしろ、同じことを何度も聞くことに喜びを示すものである。おとき話をねだる子どものしつこさは、しばしば大人をへきえきさせる。くりかえしきいているうちに、慣用による理解が生まれるわけだから、大人が自分であきたからといって、くりかえしを止めるのはよろしくない。

これはことばだけの問題ではない。生活や行動においても、

基本的なものをくりかえすことの意味はどんなに重視してもし過ぎることはない。ものごとの意味を説明したり、理屈を言ったりすることは子どもにとってあまり効果がない。だまつていと思ふものをくりかえず。そうすれば自然にすぐれた文化を身につけるようになる。いまの教育は全般に、このくりかえしの意義を忘れてゐる。暗誦などは古くさいとされているが、はたしてそうかどうか考えてみたいものだ。

きのう届いた雑誌で、ある女流の作家が、おとき話の非論理を指摘している。浦島太郎に「乙姫さまが玉手箱つていう、とてもきれいな箱をおみやげにくれたのよ。そしてこれは開けてはいけません、て言ったの」と話したら、四つになる女の子が「開けちゃいけないなら、くれなきゃいいのに。乙姫さま嫌い」と言つたというのでこの作家はひどくおどろいて、学ぶことのある方々を考えている。

玉手箱をおみやげと解釈したりしては、おとき話の生命は台なしになってしまうし、子どもにコマシヤクレタ口をはさませるのを自由とはきちがえるのも困つたことだが、いまはそれに触れている余白がない。

本當の教育は、リクツを言わず、だまつてくりかえしにはげむ。  
(お茶の水女子大学)

## くりかえし

自分のことで恥ずかしいのですが、私は野球が大好きです。どうしてこんなに好きになって了ったのか、よくわかりません。「三者凡退」を「三者ごんたい」と聞きまちがえて、それを信じて居た人なのですね。

プロ野球も好きですが、それにもまして好きなのは高校野球です。

幼稚園も夏のお休みに入り暫くすると、甲子園の高校野球がはじまります。さすがに夏の休みもたけなわと云う頃で暑いこと暑いこと、あぶら蟬でしょうか、「ミンミンミンミン」としぼり出されるような鳴きごえを耳にしながらのテレビ観戦、見ている方も暑いのなら、やっている甲子園もカンカン照り、砂ほこりと若人の熱気がつたわって来る、この様な光景の高校野球が又今年もやって来たのです。

今年は何でも第五十七回だそうですから、その歴史は古く、絶えることなく繰り返されて来たのも、それには何かの魅力があるのでしょうか。



## 高木良子

日本全国、その地方を代表して来た選手には、それぞれ皆違った味があります。北海道の選手には、何か夏の短い様子が顔色にうかがえるし、南の地方の選手は、猛暑の中でも平気ですといわんばかりのたくましさが見られます。入場式、行進、たくましい腕、足、まだここにはこの様な若人が居るのだと、ほんとうにたのしいことだと思えます。近頃はユニホームなど、なかなか整って来たよう、何回か出場ของทีมの中に、プロ野球なみのスタイルの学校もあるかと思えば、初出場とあって、必要以上のものは身につけませんと云う質素なチームもあります。この学生らしい、素朴な様子は何かホットしたものを感じます。

いよいよ試合開始、バッターが頭にあわない大きいヘルメットを手に、審判員にあいさつをする姿、デットボールを受けると却って恥じいるかのように、がまんをして駆け出して塁に出る姿、プロの選手にはあまり見られない姿です。デットボールを出してしまったピッチャーは、帽子をとり心をこめてあいさ



つをする、どれもこれも一挙一動がほんとうに清らかで、この暑さもふきとんでしまいます。あたりまえのことといえ、それまでですが、何か感激ひとしおの気持になるのも不思議なことです。

こんな場面もよくあります。高校生の場合はピッチャーは大てい一人です。二人三人と予備のいる学校は珍らしいことですから、調子がよい時はいいのですが打たれ出すともうかわりはありません。打たれても打たれても投げなければならぬ投手、そこには、くだけはならない気持がむくむくと生まれてくるに違いありません。

野球は自分一人では出来ない。九人の選手がお互いにはげまし合ってこそ勝てるのです。そこにはいかにいられない友情、一人一人の責任感もわいてくることでしょう。このあつい思い出はこれからの人生に本当に役に立つに違いありません。私は本当にこの若人がうらやましくて仕方がありません。

今年はず志野高校が優勝しました。又来年も、又来年も新しい学生がこの尊い経験をして又去って行くのです。そして毎年くりかえしたのしみに待つのは私ばかりではないと思いません。

\* \* \*

もう一つ忘れ得ないくりかえしがあります。それは八月十五日の終戦の日です。毎年この式典には両陛下が御臨席になられることも忘れられないことでございます。

あの昭和二十年八月十五日、当時私は日光山門御用邸（現在東照宮の隣り）で迎えました。

義宮様（現常陸宮）のお相手で丁度おそばに居りました時でした。陛下の終戦のおことばを当直の者五、六人とラジオの前でうかがいました。戦争は終わったのです、でもそれは敗戦なのです。つかれ果てた五、六人の姿は無言です。「元氣を出さなくては駄目です」と大人をばげまされたのは、たしか初等科三年生でいらった義宮様でございます。

それからの日本は、ほんとうに容易なことではありませんでした。私もそのおことばのように元氣を出して、日本中が元氣を出して今日の日本になったのだと思います。

毎年くりかえされる終戦の式典、荘重な式典をテレビで拝見する度に、この戦争だけはくりかえさないで下さいと、心から祈らずには居られません。

（学習院幼稚園）

# 幼児教育に「ゆとり」と「ゆめ」と「ゆたかさ」と「ゆたかさ」を

松 隈 玲 子

「ゆめ」と「ゆたかさ」

「ゆめ」は時間的には未来にかかわる問題であり、発展性、可能性をもつ未知なる部分、空想的要素の強いものである。ことに既知の世界よりも未知の世界にかかわることの多い幼児にとって、おとなの目からみると、ゆめと現実との混同とみられることも、幼児自身は、既成観念にとられない、子ども自身の現実をふまえて思考し、行動している場合がしばしば見受けられる。このように、子どもの「ゆめ」は「現実」とはっきり区分して考えられるのではなく、ゆたかな現在を経験することが、未来のゆめを育てるものであることに気付かされる。

「ゆたかさ」は時間的には現在にかかわるものであり、現実的、具体的な思考・行動の中から理念的なひろがり、質的なふかまり、たかまりをもつものである。

即ち、その時、その場のものに対する皮相的なあるいは量的なつながりに終始するのではなく、そのものとの深いかわりあい

をもつと同時に、横へのつながりをもち、関係的に思考や行動を發展させていこうとするものである。

このように、「ゆめ」と「ゆたかさ」は一面からみると次元の異なるものであるが、幼児期における子どもたちの思考、心情の発達を育てるといふ立場からは、一連のつながりをもつものとして考えることができる。したがって「ゆたかさ」は現在にも未来にもかわるものといふことができるであらう。

このような立場から、幼児期における「ゆめ」を大切に育てることの意義を「自己」「人」「もの」の三つの関係を通して考えてみたい。

## ○ 自己とのかかわり

ゆめをもつといふことは、心の不安定な状態においても、心の安定した状態においても可能である。前者は自己の欲求不満を現実からの逃避という型で「ゆめみる」代償的な行動ともいえる。マッチ売の少女がこごえた手でマッチをすり、小さな手をほのお



にかざした時、ほのおの中に現れたごちそうや、ストーブや天国のおばあさんの顔は、飢えと寒さで冷えきった少女のみたまぼろしであったかも知れない。しかし少女はそのまぼろしに幸せをゆめみて昇天する。アンデルセンは、薄幸な少女に、自己とのかかわりにおいて、幸せを与え、主人公の立場にたつ読者の心になぐさめと救いをもたらせてくれる。

しかし、幼児期における「ゆめ」はこのように自己の欲求不満の代償の型で与えられるものであってはならない。

ハーロー博士のアカゲザルの実験の例にもあるように、針金の代理マザーは、授乳を可能にする哺乳びん付きであつても、子ぎるの愛情の対象とはならず、子ぎるは布製の代理マザーにしがみつぎ、その感触に心の安定を充足して後にはじめて外部のものに対する知的好奇心を示すという事例は、人間の子どもも幼児期において、母親あるいはそれに代る保育者との心の安定を得て後にはじめて、外界のものに興味をもち、かかわりをもとうとし、そこから「ゆめ」や「希望」を見出し、いこうとすることと関連して考えられる。

すなわち、自己とのかかわりにおいてもつことのできる健康な「ゆめ」は、「心の安定」をよりどころとして育くまれるものであるということが出来る。

人見知りをする子にとって見知らぬ人は、恐怖の対象でしかないし、電車のゆれるのをこわがる子は、窓からどんなに美しい虹が見えても心を動かされることがないなど、幼児期における「心の安定」の重要性は、多くの事例を通して考えることができる。

#### ○人とのかかわり

次に人とのかかわりについて考えてみよう。人とのかかわりにおいて「ゆめ」がもてるということは、「その人を信じること」から出発する。信じるということはその人をよく知ると言うことでもある。信じるということをも、「事実にもとづいて信じる」ことと「可能性を信じること」の二つの立場にわけて考えてみよう。子どもが生まれて「女の子」であつた時、両親は「きれいなおよめさんになればよい」という「ゆめ」をもつ。これは女の子という事実に即した夢である。次に子どもがだんだん成長してくると「この子はお母さん似だからきつときれいなおよめさんになるだろう」という可能性を信じるゆめをもつ。これは可能性の基盤として「お母さんもきれいだから」という裏づけがあることよつて可能性をより確かなものにしていく。

人とのかかわりにおいてもつ「ゆめ」を「子どもとのかかわりにおいてもつゆめ」とおきかえて考えてみると、「子どもにゆめ

をもつ」あるいは「子どもにゆめをもたせる」ということはとりもなおさず「子どもをよく知り、子どもを信じる」ことに他ならない。ところが、親や保育者は、しばしば子どもとのかかわりにおいてこのゆめをこわしてしまう。

三歳のM子が幼稚園から帰宅して母親に言った。「ママ、わたしS君のおよめさんになるの。今日牛乳瓶のふたがとれなくて困ってたら、S君がとってくれたんだもん」とすると母親は、「そんなことぐらいで嫁入先をきめていたら何度結婚してもきりがないよ」と答え、来訪者のあるたびに笑い話にした。この事例を通して考えたいことは、「事実を信じ」「可能性を信じる」ことの大切さである。

M子は女の子であるから、幼なくても「およめさんをゆめみること」はおかしなことではない。また配偶者選択の基準として「S君のやさしさ、暖かい心づかい」をあげている。これは将来の「配偶者選択の基準」においても充分考慮に値するものであろう。そうであるならば、笑い話として「ゆめ」も「希望」もとりあげてしまうのではなく「MちゃんはS君が親切だからおよめさんになりたい」と思ったのね。お母さんも親切なおむこさんは大好きよ。たくさん食べて大きくなったら、Mちゃんはやさしい女の子だからおよめさんにほしいなといってもらえるようになりましょう

ね」と共にゆめを未来へつなぐ親であることがのぞまれる。

。ものとのかかわり

幼児期の子どもの「ゆめ」は、しばしばものとのかかわりにおいても誘発される。

幼稚園に入園した子が入園式から帰って新しい十二色のパステルを出して父親に云った。

「パパも幼稚園の時、こんなパステルもらった?」「ああもらったよ」「みせて、Y子のと比べてみよう」「もうあるものかね、何十年もたつて」「だめなパパねえ、Y子はこのパステルお母さんになつてもずっともっておくよ」Y子はパステルを大事に枕もとにおいて眠った。

新しいパステルがうれしくて、おとなになるまで大切にしようとうゆめみた幼な心は、「パステルは使えば減るもの」「何十年も保管しておくわけはない」という父親のおとなの論理をこえて、幼稚園生活への「ゆめと希望」をいきいきと表わしている。Y子の場合、これまでまわりの人から与えられる「うれしいでしよう幼稚園に入って」ということばによって抽象的な期待とよるこびをいだいていた園生活が、一箱のクレパスによって一挙に具体化されみぢかなものとなったのである。



紙面の都合上、多くの事例をあげることができないが、保育者は「ゆめ」の生まれる素地を大切にし、その時を適切にとらえながら子どもと共に「ゆめ」を育てるものでありたい。次に「ゆめ」の生まれる素地としての「ゆたかさ」について考えてみよう。

幼児期におけるゆたかさは、自己、人、物との深いかかわりをもつことにおいて育成される。前期における情動的なゆたかさ、後期における知的、科学的なゆたかさは共に幼児期の子ども的心情を育てるプロセスにおいてなくてはならないものである。

一つの例をあげてみよう。幼児前期では、しばしば自己とのかわりにおいて情動的なゆたかさが先行する。虫かごの中で鳴く蟬の声を「お母さんの所へ帰りたいよー」と聞き、「暗くなっておうちがわからなくなるといけないから、逃がしてあげよう。お母さんが探しているかも知れないね」といって苦心して捕えた大切な蟬を逃がそうとする。子どもの蟬に対する思いやりの心は、「自分が遅く帰るとお母さんが心配する。お母さんが探しにきてくれる」という生活経験によって育てられた親と子のかかわりあいのゆたかさを表わしている。しかし幼児後期になると、情動的なゆたかさばかりでなく、知的科学的に裏づけられたゆたかさが必要となる。即ち蟬の生態を科学的に理解した上で「地上での生活の短かいこと」「その短かい生活の中で、父となり母となるた

めの大切な営みのあること」を思い、生命を大切にしようという気持ちから捕えた蟬を逃がすことのできる心を育てたい。更に蟬とのかかわりあいを通して、親のいない所で育つ昆虫の生態に目をむけ、お母さんがいなくて淋しいだろうと思うばかりでなく、親の保護のない所で育つ昆虫にはどんな本能のそなえがあるか、また親はどんな所に産卵しているかということから、人知ではわかり知ることの出来ない自然界の恵みや営みに畏敬の気持ちをもつことができるように育て導ぶことも、知的科学的なゆたかさであると考えられる。

昆虫が好きで一日中でも虫取りをし、昆虫図鑑を調べることに熱中する子が「昆虫学者になりたい」という「ゆめ」をもった時「昆虫の形体や種別にすぐれた学者」であるばかりでなく「昆虫の生命を大切に思い、愛情をもって研究にかかわることのできる学者」になれるよう、美声に恵まれた子が「歌手」へのゆめをもった時「お金や人気や、表面的な歌のテクニクの巧みさをよろこぶ歌手」への道を薦進することのないように、心情のゆたかさを育てることが保育者の大切なつとめである。そのためには保育者自身の「ゆたかさ」が望まれることは言うまでもない。このことはま幼児教育、ひいては人間教育の基盤でもある。(つづく)

(西南女学院短期大学)

# 私の幼児教育論 XIII

神 沢 良 輔

## 三 保育の基本（十一）

—— 幼児とのかかわりあいの中で ——

(XIII) 幼児のせいにして、自分の保育の自己満足をしな

(1)

前回でみてきたように、「幼児のひとつひとつの行動には、それぞれ意味がある」。しかし、もし、保育者がこのような幼児の行動の意味について理解することができないとすると、そこには、いろいろの問題が待ちうけている。

そのひとつは、幼児の表面に出てきたみかけの行動だけで、その幼児や、その幼児の行動を判断したり、それをなにかの型にほめてレットルをはってみたりするということである。そして、その幼児をいわゆる問題児ということにきめこんで、「そのような幼児だから」ということで、幼児のせいにして、自分の保育の問

題点をすりかえて、自己満足するということである。  
つまり、

“あの子は、反抗的な子”

“あの子は、落ち着きがなくなにしても長続きしない子”

“あの子は、ぐずでだらしない子”

“あの子は、わけのわからない子”

“あの子は、知能の低い子”

“あの子は、意欲がなくて集中力のない子”

“あの子は、自閉的傾向の強い子”

“あの子は、要求不満の強い子”

“あの子は、忘れ物の多い子”

“あの子は、ひとりでしか遊べない子”

などという会話が、保育者どうしの間で交わされることはないだろうか。

それは、保育者にとって、自分の保育がある特定の幼児によっ

てうまくいかなかったりするというような、きわめて危機的な場面に遭遇したときによくでてくることばでもあろう。もちろん、それは、必ずしもその幼児によってひき起されたかどうかというより、保育者がそう思いこんでいるということの方が多いのであろう。

たとえば、降園の忙しいときに、靴がなくなったりして、それをさがすために自分のクラスの幼児の集合がおそくなったりすると、他の同僚に対する気がねも手伝って、

“ごめんね、迷惑かけて、帰りがけにまた〇〇ちゃんの靴がなくなつたのよ”

というようなことばをよく聞く。

ここまでは、まあ同僚に迷惑をかけたおわびと現状の事実の報告ということで当然のことであろうが、報告は、これだけで終らない場合もある。

“〇〇ちゃんは、だらしなくてほんやりでしよう。靴箱に入れたけどないっていうのよ。よく調べてみたら、靴箱に入らずに、テラスに放つておいて部屋へ入ってきたらしいのよ。みんなできがしたら、テラスのすみの方にバラバラになってあったの”

というように、〇〇ちゃんがいかに保育者を手こずらせているかの説明がつく。

そしてさらに、“あの子は、いつも忙しいときに、あれがない、これがないっていいだすのよ。ほんとにだらしがない。お母さんもだらしがないからね”

と、いうような平素の行動に対する保育者の不満がさらにそれにつけ加わる。

その上に、自分のクラスの幼児に向つて、

“あのね、みんなよく聞いて、〇〇ちゃんのように靴を下駄箱にきちんといれない子は、先生は靴がなくなっても知りませんよ”

と、こんどは、保育者の不満が幼児の方に向いていく。

(2)

このような保育者の気持はわからないでもない。でも、この保育者の行動をふり返ってみると、靴のないという事態におわれて、幼児とのかかわりあいの中で、その幼児を受容しようというものがなくなってしまう。いうまでもなくその幼児にとつてみても、降園の前になつて靴のないことを発見したときは、確かに大変なできごとであつたと思われるのである。だから、靴がないとわかつたときは、

“困つたね。先生も靴をさがしてあげましょうね”と、まずそ

の幼児の感情を安定させてあげるべきであろう。

しかしこのようなことのできなかつた保育者の行動には、降園前の忙しきさということもあるけれど、その幼児はこれまでも降園前に、靴がないことがあった、また、その他の行動でもだらしがなかった、ということ、同じことをまたくり返したという、その幼児の行動や態度に対する不信感というようなものが、保育者の感情のどこかにあつたためではなかつたのだろうかとも思われるのである。

保育者も人間である以上、すべての幼児の感情を受けとめることは決して容易ではないことについては理解できる。もちろん、この例に示すような、靴のしまつについては、保育者が平素からのちよつとした心掛けで、注意をしてみやうあげていけば、このようなことにはならなくてすんだことではないのだろうか。

いずれにしても、自分の保育での問題点を、自分の保育の反省のために活用せず、"幼児のせい"にして、自己満足するといふことは、その保育者の成長にとつても、また幼児の成長にとつても、きわめて危険なことであろう。保育者を信頼して園にきている幼児たちが、このようなことによつて、心のさびしきさを感じないようにならねばと思うのである。

(XIV) 幼児を先入観をもってみない

(1)

前述のように、自分の保育上の問題点を、幼児のせいにするこゝによつて保育者は、その場面でなんらかの自己の感情の安定を得たとしても、そのことは、その幼児にとっては、問題の解決にはなつていない、逆に保育者に対する不信感がめばえたということになるかもしれないことを、保育者は理解すべきである。

つまり、前項でみてきた靴の例でも、同様であるが、それがもし、他のどのような幼児についても保育者は同じような反応をしただらうかということである。

ある幼児の場合には、

"あの子今日どうかしてるわ。帰りがけに靴がなくなつてるのよ。もしかすると、だれかがいたずらしたのかしら"

というようになったとしたら、ここには、幼児のせいにするということと同時に、もう一つの問題が含まれているということになる。

つまり、この保育者は幼児に対して、"あの子なら"という先入観をもつてみていたということになるのではないだろうか。も



もちろん保育者にとつて、幼児の行動の予見をすることは必要である。そのために、ひとりひとりの幼児のパーソナリティや行動の特性・その変化などについて記録しておいたり、理解することはたいせつである。

しかし、それは、幼児の発達にとつて必要ならと、つまり幼児の可能性を、幼児の行動の中から発見し、幼児が自己実現できるための援助としての、幼児の行動の予見としての役にたたなくては意味がない。

それは決してあの幼児はこういう幼児なのだから、という先入観をもって決めこむことは異質のものだということができ、また、そのような先入観をもつことによつて、本当のその幼児の姿を見失うということになってしまうということになる。つまり、先入観をもってみるということ、一方では、偏見をもって幼児をみるということにもつながるといふことになる。

(2)

幼児を正しくみるということは、保育のもつとも基本となることであろう。それは、ありのままの幼児を、ありのままにみられる保育者でなくてはならないだろう。また、このような見方ができるためには、ひとりひとりの幼児のすばらしい可能性を信頼

し、幼児と同じ立場に立つて、ともに生活する中から生まれてくるものでなければならぬ。

それは、また幼児と自分とが一体であるという、保育者の信念や体験の中からでてくるものでもある。

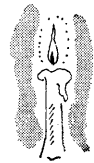
「今日は、幼児とびったりうまくいった」という保育者の喜び、体験の中には、保育者の幼児に対する先入観の入りこむ余地はないと思われるし、その中で保育者自身も自己実現でき、幼児とともに発達していくことが可能になるのではないだろうか。

それは、決して、特別になんとかしたという作為の中でできるものではなく、やはり、きわめて自然な保育の中に、自然になれるものであろう。私などは、現場にいるとき幼児とともに生活しようという努力はしたつもりではあったが、それは努力したということだけで実際にはそうなっていない自分を発見することばかりであった。しかし、一方では、保育者たちが、幼児のことについて、幼児の外側からみて、得意になって話し合っているのを聞くと、とてもかなしい気持ちになって保育者に対して、何もしてあげられない自分に対するいらだたしきを感じることも多かった。

やはり、保育者の幼児とともに生活しているという実態のなかで、本当の幼児を理解するために、努力することがたいせつであらう。(つづく)

(暁学園短期大学)

# くりかえし



森 下 博 三

「くりかえし」「くりかえし」と、お題目をくりかえし口の中で唱えているうちに、「くりかえし」についての、いろいろな情景がいきりみだれて、走馬燈のように駆けめぐり、目を重ねるうちに頭の中をお題目が占領し、子どもの頃のうれいそして楽しいことを待つときのような、軽い興奮状態がねむりをうばってしまった。

「くりかえし」この言葉のもつ意味の大きさ、そして噛めば噛むほど味わいのあることに感心させられ、こうした題目を決められた方々に対して、敬意を表したく思った次第である。始めおさそいをうけたときに、私のような門外漢が、臆面もなく紙数を削ぐことはと、お断りすべきと思いつつ、つい言葉のもつ魔力に引きずり込まれてしまったようである。出題者の真意にもとる点については、悪しからずご容赦願いたい。

「くりかえし」この言葉のもつものは、主体をなににとるかによって、それぞれ変った意味をもつようである。いま天文的に考えれば、われわれの存在する太陽系は、太陽を中心とし

て、それぞれ自転・公転をくりかえし、それによって時が過ぎて日となり、日が加わって月となり、月を重ねて年となる。そして暦はくりかえす。また気象的にみれば、これら天体の自転・公転のくりかえしによって、四季が生じ、寒暖をくりかえす。雨水は山を下り、川となって海に入るが、この道程において蒸発作用によって雲となり、又雨となって循環する。偉大な自然のくりかえしである。

一方、こうした多彩な自然の恵みの中にあってはじめてわれわれ人間の感情も育み、過去より現在に、現在より未来へと、連続した成長発展を続けてゆくことが出来る。

\* \* \*

「生まれたての赤児は、なにものにも染っていない、ボールのようなもので、赤心であり、これを丹心ともいう。それが日を重ねるに従って喜怒哀楽を覚え、これのくりかえしによって成長するが、もとの完全な球（心）には復し得ない」と。たしか中学一年のときに教わったことがある。一人人間は何のため

に生き、俺は苦しむために生まれてきたのだらうかなど、も  
のごとに疑問を感じ易い年頃でもあったためか、一生懸命にこ  
の言葉について考え込んだ。そしてその結果は、視・聴・嗅・  
味・触の五感によって引き出される感情は、喜怒哀楽それぞれ  
の形となつて、その都度心のボールに突起となつて附着してい  
く。ときにはこの突起が、そのときどきの感情や経験の程度に  
よつて、大きくもなり小さくもなる、感情は経験のくりかえし  
によつて得られる、知識と意志によつて選別され、有効な行  
動力となつてゆく。そしてこうした突起が沢山出来て、あたか  
も粟のイガのようになるが、煩惱の多い人間は、元の丹心とは  
なり得ないのだらう、また寄りどころのないイガは、風に吹か  
れて転がる心配もあるが、二個三個と、より多く組み合つてい  
れば、お互いに不足分を補つて援け合いころがることもない。  
これが人間の発展につながる協力というものなのだらう、と。

\* \* \*

いまかりに、「くりかえし」が一次的であるとすれば、  
これは直線となり、点と点を結ぶ線上の活動にしか過ぎないこ  
ととなる。では、二次元的であるとするならば、これは長さ  
幅だけの広がりであつて、平凡な変化のない、もちろん発展を  
望むことのむづかしい平面となつてしまふ。実際にはこれでよ

いのだらうか。マンネリズム化した、根をもたないものである  
ならば、これでも止むを得ないかも知れない。しかし、人類に  
は歴史を根とした有効な発展が約束されなければならない。そ  
こで、三次元について問題を考へるとすれば、長さ・高さ  
の次元が加つたこととなり、われわれの認識する空間に相当  
し、くりかえしの場に強度と弾力が加わることになり、発展が  
約束され得ることになる。

\* \* \*

くりかえしには、綺麗ごとばかりではなく、戦争といった苦  
いくくりかえしもあることだが、くりかえしによつて多くの経験  
が生じ、経験によつて強力な意志が作用して、これらを抑止す  
ることも可能なことで、いつも連続した、よどみのない生活の  
中に生き甲斐を求め、目標に向つて協力し、培われた経験の結  
集を基盤として努力することが、人類の発展につながるもので  
あると信ずる。そして、いま四つん這いの子も、同じように生  
活をくりかえし、先人の築いた土台の上に立つて、よりよき発  
展に努力すると思へるとき、これらを育む環境をよりよくして  
おくことが、現在の私達の責務というものではないだらうか。

(東京天文台)

# くりかえし



関 治 子

私たちは毎日生活している。くる日もくる日も、くりかえしくりかえし生活している。よくあきもせず、人間とはよほど辛抱強いのか、それとも機能上、こうしたくりかえしのリズムがなくならないのであろうか。

生活の中には基本的なもので、無意識のうちに行動しくりかえしていることと、規則的にオートメーションしながらに行動していることがある。私の朝の目さめから出発までなどはこの部類であろう。又、いくつかのボタンをとり混ぜてくりかえしている場合がある。これは機能的に考えてしまったので些か味気ないが、そこはよくしたもので、人間には感じ考えるところができる。発見や工夫、おどろき、よろこび、気まぐれ、執念……がある。もちろん失敗もある。

人間を木に例えるならば、こうした生活を規則的にくりかえしている部分が幹であり、発見や工夫などもろもろに吸収しつつ生活している部分が枝や葉とでもいおうか。やがて花の開くこともある。時には折れてしまうこともあるかも知れない。子

どもの中には幹のか細い木もある。又なかなか葉が繁らない木も、葉ばかり繁茂して幹からしっぺ根を張らない木もある。

\* \* \*

ある一本の木の話（四歳入園児）。

彼はある鉢から植えかえられてきた。今、林の中に植えられようとしている。彼はひどく興奮状態で入ってきた。一瞬でも落ちつくことを知らない。皆が腰かけると彼は歩きまわる。鉢を持つと手から離れて部屋の隅にとんでいく。廊下に出ると人にぶつかるなどなど。

しかし何日か経ってみると、彼にはちがう面がみえてきた。

第一はありとの対面である。毎日毎日庭に出てありとあそぶ。毎日ありとの生活をくりかえしている。つかまえる、つぶす、つかまえる、はわせる、水たまりに入れる、袋に入れる、土も入れる。次は、しゃくとり虫を見つけ出した。みつけた木の所へ通う、虫をさわる、手にのせる、はわせる、木の枝に戻す、友だちと話す。ある日姿を消した虫を、まわり中探してい

る。今度は他の幼虫を背の高い木に探す。高い所に手を伸ばして掴まえる、台を探してきてもっと高い所までとどくようにする。いつの間にか古タイヤを重ねている。毎日一緒に同じ木にやってくる腹心の友ができた。雨の日には窓から手のとどく所で虫を探す、虫の出ている本を見る。

こんな彼の日常は、虫の世界にあげくれ、来る日も来る日もくりかえし、ためつすがめつ虫に接している。しかしこうしにくりかえしの中に、虫の興味だけでない、何と数々の枝や葉が出てきたことであろうか。その中で、彼が最も苦手としていた友だちとのふれ合いが、このくりかえし生活の中から生まれる機会が訪れたことは大きな収穫であった。

こうしたくりかえしの生活の中にひたり切ることによって安定感を持ち、はじめのころの人に迷惑をかける行動はおちついてきた。私はそれを見守り、近づく時を持つとした。結局あせってはいけないということだった。ただ今四か月、まだどんな木に育っていくかわからない。でもどうやらひっくり返らずに、何か面白い素敵な姿をみせて林の中に立っている。

\* \* \*

ひとりの子どもだけでも、これだけの姿がある。これも一日中の姿ではない。ほかの子どもたちには、それぞれちがう一日

を過ごす姿がある。私たち教師は一日中、子どもたちと共に過ごし、育てている。知る人ぞ知る、忙がしいとか何かではあられわせない生活であろう。相手が育っていくものであるからこそ育てようと努力できることなのである。これは、子どもだけでなく教師としての私を省みても同様である。くりかえしの毎日、くりかえしの毎年である。しかし単なる同じことのくりかえしであつたらどうであろう。

木を育てる時、又自分も木である時、日光や水や肥料をくりかえし与え、与えられる。何をどれだけ、何時与えようかと観知をもつてそれを見つけ出し、実行することこそ大切なのではないだろうか。そしてそこに喜びがある。生きているものなのだから、育てるために迷惑な水をかけてしまつては——その水をひき戻すことはできない。

\* \* \*

今、部屋の中に鉢植がある。一時、風を当て過ぎて黒ずんでしまったポトスは、黒ずんだ葉を落し、水をやり過ぎないようにがまんをして潤らしてみたり……やつと元気がよくなった。ジャスミンは半病人、今や水、日光、風などに気を配り、一喜一憂という所、身につまされている。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

“かたまり”づくり

飯島俊勝

幼児教育の世界に入ってまだ一年余、やっと二年生になった所である。しかし、幼児教育の世界に入った、といっても、家で保育園をしているので、事務でも手伝おうかと、軽い気持ちからである。そんな新参者のまわりで展開しているのは、新しく、見、聞きすることばかりである。

幼児教育とは、保育とは、そして、その教育、保育の理論とは、倫理とは、又、人間の習慣から、民族の慣習からいうところあるべきだ等、多面的にいろいろ説かれているが……。さて、何が教育であり、保育であるのだろうか。学問的に問われると、何もわからない。保育原理を学んだわけでもない。幼児心理学を学んでもない。学生時代、応用化学で窯業を少しかじって、仏教の真言学を専攻し変わった道を歩いただけである。そんな目で見た子どもたち。四年前から全面的に「自由保育」といわれている形態をとり始めた園の子どもたち。

私の園は、保育園である。創立二十三年目を迎えたのである。「子どもたちの為に」と一生懸命の二十三年目であるが、「自由保育」の形態を取り入れてからが真の創立になるのかも知れない。

保育園と幼稚園とは、管轄省の違い、法律・制度の違い等はあるが、その園で保育されるのは、どちらも子どもたちであるということである。しかし、その同じ子どもたちに保育する保育内容が、著しく異っているらしいのはなぜなのだろうか。

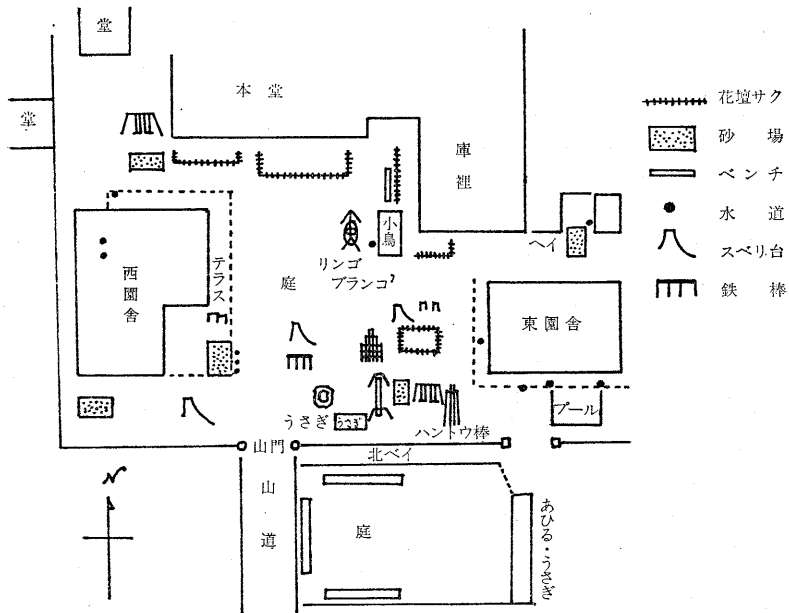
こうしてみると、不勉強から出てくる疑問が非常に多いわけである。しかし、この疑問点の答は、「……であるからしょうがない」「……の規則になっている」という答を聞かんが為の疑問点でもなく、勉強をしたいわけでもない。保育者の観念的な考えで、制度、規則があるが為に、子どもに不幸な保育をしなければならぬ。あるいは、子どもに保育するが為に、かえ



って不幸にさせてしまう保育をしている保育者が、いかに多いのではないかと思われる。まずは、子どもが王様、主体であることを忘れてはならない。行政の為、保育者自身の労働問題の為に、子どもたちを犠牲にしてはいけないのである。特に、園でピアノを教えています。英語を教えます、等々……保護者の弱点を利用する保育というのか、そんな経営をしている園もあることを憤慨する思いで見、聞きするのである。

第一には、自分たちで改めることのできる、保育者の保育に対する、子どもに対する姿勢のあり方の勉強をしたいわけである。これは、ルール、モラルをわきまえた良き一人の社会人であることの勉強であり、「先生」という言葉の上にあぐらをかいている自分を見つめ、それを取り払うことでもあるような気がする。保育する以前に、自分が真の先生になるべく切磋琢磨することである。そして、福祉をしますといいながら福祉を食いものにし、先生をしますとって、先生を食いものにならないことである。

園は、寺院の境内に建てられている。南側は土壁であり、園庭は外部の道より一・五メートルほど高くなっている。園舎は拡張により西園舎と東園舎とに別れている。寺の敷地内の既成



された場所にできた園だけに、園庭は非常に変形している。その外に山門があり、山道（幅十二メートル、長さ百メートル）があるが、これが結構園庭の役目をしてくれる。寺であるので、木は大きな老木がしんしんと繁っており、これが良い木陰を作ってくれる。

今、園で盛んに行なわれている遊びは、水遊びが多い。水を利用しての砂場での、ダム、池作りである。五歳児においては、プールでの水遊びがあるので、より多く日光浴ができるように、九時には水着に着替えて、園庭ではビーチゾウリを履いて遊ぶ。この姿になると、ますます、砂場でのダム、池作りは盛んとなる。三、四人で始まるわけである。時には人数はだんだん増えるのである。やがて子ども同士で、

「今日は○○ちゃんは水汲み当番だよ」

「××ちゃんも」

と、役ぎめから始まる。すると水汲みに当った子は、ジョロに水を入れて砂場に運ぶ。運んできて川に当る？ 所から水を流す。始めは砂が乾いているので水はすぐ染みてしまう。が、やがて水汲み当番は、せかされて何回か運ぶうちに水が溜まりだす。すると、子どもたちの心に余裕ができるのか、いろいろ

な会話が始まり、直接今している遊びに関係ない会話までが始まる。一方では水汲み番は、スクータにジョロを乗せて運び、「水まき車がきました」と。又一方砂場の中では、A君の誕生日だったのだろうか、こんな会話が、

A君「今日、僕の誕生日なんだ。お母さん街へケーキを買に行っているんだ。○○ちゃんも、××ちゃんも、僕んちに来て遊ぶんだよな！」

B君「Aちゃん、僕も行ってもいい？」

A君「うん、いいよ。おいだよ」

B君「それじゃいくよ。プレゼント持って行くよ。でも、何がいい」

A君「なんでもいいよ」

B君「お姉さんの、きれいな折紙をもらってプレゼントに持って行くよ」

A君「それじゃアカードを上げるね」

砂場の横の遊動木に、他の子と乗りながら聞いた会話である。

大人と言葉は異なるが、会話自体は、大人と全く同じであり小さな社会ができあがってきている。当然、その小さな社会には、幼児なりのルールもできあがってきてるし、また、人間関係で大切な協調性等も遊びの中から育っていつている。

園児の間でもう一つ、おもしろい遊びが流行っている。これは、「カタマリ」作りである。砂の「カタマリ」を作るのである。いわゆる砂の「ダンゴ」である。しかし、園児たちは、「ダンゴ」とは言わずに「カタマリ」という。それは、園庭の上部層の荒い砂を除き、その下の細かい砂を手のひらで集め、口に含んだ水でぬらし、固めるわけである。その「カタマリ」に乾いた細かい砂を何度もかけて、手の中で上手にまるめるわけである。ピカピカに磨き上げるわけで、それを大事に持って、その光り具合を友だち同士でくらべるのである。この「カタマリ」作りは、八年前頃から、園で代々伝わっている遊びである。それが昨年の始め、砂場のプラスチック製の小さなコップの中にしめた砂を一杯に入れ、上面を磨き上げて「カタマリ」を作る行動がみえた。必然的に、みんなが砂場のコップをほしがる。コップの数には限りがある。すると、回りにある砂が入る用器は全ての物が、コップの替りとなってしまふ。砂場のシャベル、おやつ後のヤクルトの用器、ビンのキャップ……。その中では、ビンのキャップが、一番子どもたちには好まれた。キャップを使つての「カタマリ」作りは、それが、子どもの中に丁度入る手頃の大きさの為か、あつという間に園中の子どもに広まってしまった。どの子どもものポケッ

トの中にも必ずというくらいに、いくつかのキャップが入っている。その中の二、三個のキャップには、「カタマリ」があがっている。でき上つた「カタマリ」は、家庭に持つて帰る。園のキャップは、減る一方で、私が飲むビールではたりやしない。そんなことで、先生のキャップ集めは大変であつた。一時は、食堂からキャップをいただいたものである。この「カタマリ」作りが、最大に加熱した時には、家庭でも「カタマリ」作りは行なわれ、しかも、保育園の砂でなくては良い「カタマリ」ができないと、ビニール袋に園の砂を降園の時に持つて帰る子どもが多くなり、「保育園の園の砂がなくなつてしまふから『カタマリ』は保育園で作らましようネ。お砂の入つたビニール袋は、自分の下駄箱に入れておき明日またしましよ」といつたくらいである。又、家庭では知らずに子どもの衣服の洗濯をして、ポケットに入つた「カタマリ」で、一緒に洗つた物が泥だらけになつてしまつて困つた話も、母親たちから聞く始末である。しかし、子どもたちはそんな事にはおかまいなし。着ている衣服も砂だらけにしての「カタマリ」作りである。その「カタマリ」作りの子どもたちの作業を見てみると、単純と思われたその作業は、いろいろな作り方のある事を発見する。

①しめった砂をキャップにつめる。

②キャップの中に水を入れておき、そこに乾いた砂を入れる。

③キャップの中に砂を入れておき、そこに水を注ぐ。

最初にキャップで「カタマリ」を作り始めたころの子どもは、大部分が①であった。(用器を使わずに作るには、しめった砂をまず作らねばならなかったことからであらう)

②は、水道の水をキャップに入れて砂のあるところまで運んで作る。しかし、運ぶ間に水がこぼれやすくて作るのがむずかしいようである。

③は、砂をキャップに入れて水道の蛇口の所にいき適度の水を入れる方法を考えたしている。

もう一歩進んだ子どもたちは、砂のある所に他の入れ物に水を汲んでもっていくか、あるいは、口に水を含んでいって口からキャップの中に水を移す方法で作ることを見いだしている。

各々子どもたちの工夫によって、いろいろな「カタマリ」の作り方が考え出され、又、友だちの作るのを見て、こんな作り方があるのか……と、学んでいる姿が見うけられるのである。

又、この「カタマリ」作りでは、こんな事も知らずに学んでいる。それは、雨の降った後は、雨水で流された砂が最後に集まる所に細かな砂があることを。又、小雨が降った後には、園庭

のどこに行けば乾いた砂があるか等……。一つの遊びから友だちの行動、自然の観察等、多くのことを学んでいる。特に、「カタマリ」に対する親愛の情は、作り方の仕上げの作業でみる事ができる。砂を何度もかけて光りだした「カタマリ」を、より磨く為に、つばきをつけてこすり、又、細かい砂をかけ、スポンにこすりつけて磨く。磨き上がったキャップの表面を、頬にこすりつけたり、人差し指びで感触を味わったりしている姿で。

この姿は、「カタマリ」を通して、大自然を構成している五大(地・水・火・風・空)の中の、地に対する興味を、子どもなりに十分肌で感じているのではないだろうか。こんなすばらしい「カタマリ」作り。子どもの最高の芸術作品とも思われる「カタマリ」。単なる「泥あそび」といって、又、よごれるからといって、けしてやめさせる事はできないと思われる。

次の世代の為に、現場にある我々は、保育テクニク、理論等よりも、自分自身の人格の形成、又、幼稚園、保育園に出せば子どもは良くなると思っている家庭への、反省、教化が大事であるような気がする。

(芙蓉保育園)

## 海辺の生物

—葉山海岸芝崎の浜辺にて—

酒井恒

すべての動物は海で発生しましたが、その発生した海というところは、陸地にくらべればはるかに広漠たるところであります。

海と陸との境である波打ち際、その陸になったり、水でおおわれたりするところにおける動物を潮間帯の動物と申しまして、これは高等の仲間では魚の類から、下等の仲間では海綿の類に至るまで、非常にたくさん種類がおります。潮がひいてしまつて陸になつてしまつので、魚などのように泳げるものは沖に逃げていきまふ。しかし、岩にくっついていて移動できない多くの動物たちは、潮がひいてしまつと、日が照つていても、風が吹いていてもじつところらえています。二、三時間も待てばまた、潮が満ちてくることを予想してでしょうか、待つておる。その潮は、一日に二回満ちたりひいたりします。昼のある時間に潮がひいて満ちる、そうした現象はまた夜にもくり返されます。そしてまた明日も明後日も……。そういうくり返しが、何万年、何百万年とくり返さ

れた歴史を考えると、そこにおける動物たちは、潮がひいて陸になつてもある程度我慢ができるようになる。そのうちに潮が満ちてくると元気を回復する。イソギンチャクや海綿の類でも、ウニやヒトデでも、またカニやエビでも、みんな潮がひいてしまつた後、耐え忍ぶだけの習性が養われてきたわけなんです。そういう動物を中心に調べてみると、進化の歴史で、すべての動物が海からあがつてきたというその原因を、私たちの目の前に示していることになる。

ですから、海岸では陸上では見られないいろいろな動物が見られると同時に、その生活ぶりを観察すると、陸上のものと海のものとの中間という感じがします。一番下等な動物、海綿の類、ウニ、ヒトデという仲間は陸上では全然見られません。川にも湖にもおりません。海岸だけです。ウニ、ヒトデ、ナマコの仲間、イソギンチャク、クラゲの仲間、今天皇陛下がご専門に研究してい

らっしゃるヒドロゾアという非常に小さいサンゴなど、実にいろいろな仲間が生活しているのです。

貝の類は、なんといっても海岸が本場として、陸上ではカタツムリやキセルガイ位しか見られないし、二枚貝では「畑ではまぐり掘ってもない」というたとえのある通り、世界中でも見当りません。二枚貝にしても巻き貝にしても、それからずっと変化したところのウミウシの仲間、背中に八枚の貝殻をよろい戸のようにしょっているヒザラ貝という仲間、こういう陸上では見られない軟体動物が、非常にたくさんおります。

エビやカニの仲間、甲殻類と申しますが、これも庭先などでワラジムシとか、ダンゴムシそういう仲間が少しおりますが、カニ、エビ、ヤドカリ、ワラジムシといった仲間は、海岸を本拠として仲間は、非常にたくさんおります。

そのように野原か山で見ることのできない、特殊な動物が、限りなく生存しているのです。潮のひいた海岸で、石をひっくり返したり、岩の割れ目をのぞいたりして注意深く観察していると、潮のみちてくるまでの二、三時間の間にはじめてお目にかかるという珍らしい動物が、大体は百種類位は観察できると思います。

そのような動物はすべて理科教育の基本になるようなものであって、幼稚園からはじまって、小学校、中学校に至る「生物とは

どんなものであるか」ということを実際にみていただく一番いい場所ではないかと思うんです。そういう仲間がたくさん集つておるので、私は海岸の「海辺の生物」というものを理科教育の一番大事なことと思うわけなんです。

\* \* \* \*

葉山の山には、この海に直結した動物が相当入っております。カニの仲間では、ベンケイガニ、アカテガニ、庭先の植木鉢などひっくり返してみると、くるくると丸まってしまうワラジムシ、ダンゴムシ、あの類は、実はこの潮の満ち干する海岸から入り込んだのです。干場に群れているフナムシもその仲間、特にヒメフナムシという種類は、海岸から一キロ以上も山の中に入っていることがあります。海岸の生物といっても、相当数の種類が既に陸地に入り込んでいるのです。

海辺の生物を観察する手はじめとして、海岸に近いところの草地に入つてごらん下さい。生物の生きる姿として、海と陸との中間の関係がよくわかると思います。この高い所からまず、潮のひいた海岸を眺めてみましょう。一面に緑に見えている帯状のところ、緑藻類のアオノリやアオサです。陸の緑の草地のようにあざやかです。しかし、遠くてわかりませんが、その緑の層の上にもいま一つ紫黒色の層があるのです。それが、アサクサノリ、ま



たの名をアマノリという食料になる藻類です。昔から海藻の類で、緑の藻類が一番上にあつて、それから褐色のコンブやカジメが、その次にテングサなど紅藻類が一番深いところにあるといわれておりましたけれど、私たちが食用にするアサクサノリは紅藻類なんです。その紅藻が一番上にきております。現場へ来てみるといういろいろ例外もたくさん出てくることに気がつきます。

陸の動物や陸の植物が、だんだんと海岸にきて、海岸の生活になつて海へ入っているものがあると申しますと、これはほとんどないのです。そのかわり、海に生えておつた海藻がだんだんと陸上へあがつてくる傾向は、アオサやアサクサノリなどで見られます。陸上から海岸にきて水をあびながらだんだん海の動物になるという動物は、あまりみあたりません。しかし、ラッコとか、オットセイとか、クジラなどを含めての海獣、海のけもの類は、考えようによつては、一旦陸上にあがつたものが、また再び海へもどつた動物といえます。けれども、肺を持つておつて、呼吸は魚などのようにえらではなく、肺で呼吸するので、時々、上へ出てきて息をしないと生活ができないのであります。

陸の植物で海に入つてきたものの一つの例として、アマモという緑藻類があります。アマモのことを昔から非常に長い名前前で呼んでおります。「竜宮の乙姫の元結いの切れはし」そういう長い

名前がついているんです。植物の呼び名としては、アマモまたはアジモと言います。浅いところに緑の植物として生えておりますが、これは顕花植物で、水の中につかつておりながら花が咲くんです。この類を陸から逆に海に入つてきた植物といえ言えるかもしれません。

そんなわけで、動物でも植物でもみんな、海から陸へ、遠い過去の時代からあがつてきたもので、その上つてきた場所、花道と申しますか、それがこの海岸なんです。日本全国の海岸それから世界の各地の海岸、これは一つの線であらわされますが、いろいろな動物がこの海岸という線から上つてきたその場所だろうと思ひます。

\* \* \* \* \*

潮が引いた夜に海岸へ来てみると、またそれは面白いんですよ。夜の生懸つて、ほとんど見たことはないでしょう。「百鬼夜行」という言葉があるけれど、それがちょうど当てはまります。タコもはいだすし、それから岩の上に一面、昼間くつっていたウノアシ、ヨメガカサ、キクノハナガイ、ヒザラガイなど、夜になるとさかんに動き出す。そして東の空が白くなる頃には、全部もと通りにもどつてしまふ。婦家本能ですね。しかし中には遊びに出たきりともない方に行つて翌朝をむかえるやつもいる。人

間と同じでね。朝帰りもおる。帰らないのもおる。子どもに観察させるのもよい。子どもは昼間しか観察しませんからね。また明日行ってみると同じところにちゃんといる。一年中、この動物は動かないんだと、そういう判断を下します。

冬の夜というのはすごいんですよ。冬は昼間、潮がほとんど引かない。だからこんなものかと思うけれど、夜はぐーっとひいてしまう。そのために冬の夜中というのは非常に冷えるでしょ。冷えるから、いろいろな動物が、冬になると深い方に行ったり、冬ごもりしたりするんです。もし夜も昼間と同じ潮だったら、海岸にいる動物がそんな深い方に行く必要はないんです。海水の温度は、この辺で下がっても十七、八度で、二十度近くある。丁度春の大潮が冬では夜中の潮になる。霜がおりるような、凍るような冬の夜空に水がひいてしまうので、それで磯の動物が寒さをさけて退いてしまうのです。夜の潮の非常に引いてしまうことを我々は、知らないでいるんです。

\* \* \* \* \*

磯の動物の生態を調べてみると、いろいろな生活型がある。ほんの瞬間的な時間陸になるところ、そこを住いしているスナホリガニという小判形のカニ。非常にかわいい、種族としてはカニとヤドカリの中間の動物です。見ていると面白いです。潮がザ

ァーッとひくと、石がころころと転がる中に、石と同じように転がるけれど、それがちゃんと、あわてて砂にもぐる。その石ころの動きと、そのスナホリガニの動きをくらべてみると、一つは死んでいるものの転がり、一つは生きているものの転がり、潮の満ちてくる前にぱっとかけて行って、砂と一しょにすくうんです。実に面白いんです。で、間違つて石のところをすくつたら、これは駄目。石の転がりとは、やっぱり無生物の転がりですね。ところが、動物の転がりというのは微妙だけど、イレギュラーな、不規則な動きが、それが目に映るようになると、動物がすぐえるようになる。そうした時の楽しみはまた格別です。

スナホリガニの生活を観察してみると、潮がサァーッとあがってきて、ザァーッとひく、その間を己れの生活の場としている。秒で数えると何秒だろう。実に忙しい。その瞬間的な生活の継続。その間にえさも食べなければならんし、生殖行動もその瞬間を利用してキヤッチするのではないかと思うんです。生活ものんびりと昼寝しているようなタイプの性質もあるけれど、あつという間の生活もある。実にせせこましい。

西インド諸島のカニなんかもうなんですよ。水面から枝のように出ているマングローブという木の気根。長いので二米位。短いで一米から一米半位。そのたくさん生えているステッキの上

を己が生活の場としている。近寄るとぼつと上にのぼるけれど、それから上はのぼれない。ぼつと下に下がるけれど、下は水だから入れない。わずかに一米半位の棒。そこでえさを食べ、生涯をそこで終わる。人間の生活と比べてもまことに面白い。

葉山の真名瀬のような海岸の潮の引いたところをこわしてみると、蜂の巣のようになっていたところがある。そこは全部ボーリングシユルの棲家です。ボーリングして穴住いする貝にもいろいろあって、ニホガイ、ニホガイモドキ、スズガイ（鈴のようになっている）、そういう貝の生活は、岩の中に自分で掘った穴の中で送られる。岩の中で自分の体が大きくなると、つまってしまうので、つまる前に自分でその穴を広げなくてはならない。ところが、三浦半島の海岸では、凝灰岩とか、砂岩とか、砂が化した岩だからわりにやわらかですが、舞鶴とか熱海とかへ行くと、火山で出来た安山岩でカチカチに堅いんです。そんな堅い岩にもちゃんと入って穴をあけているんです。穴に入っていれば、身はきわめて安全でしょ。どうしてその穴を広げるかという点、あるものは、自分の貝殻を溶かささないような酸を出す。そして穴だけをひらげていく。イシマテがその仲間です。しかし、ニホガイは、そんな液を出すのではなく、自分が穴の中で回ります。殻の表面にやすりのようなところがあって、そのやすりで岩をけずるので

す。あの貝殻で堅い岩石を自分の住いづくりとして、しょつ中回りながら削っている。大変な生活力ですね。夜、近よってみると、きつと、異様なゴソッゴソッという音がきこえてくるだろうと思うのです。

野原に行っても、山に行っても、鳥は鳴いているし、昆虫もいて楽しいのですが、海岸に行けば、海岸にはまた陸では見られないとても多くの型の動物が群れている、その動きもまたさまざまです。そのような自然の姿をじっくりと子どもに見せるというカリキュラムがなくなってしまう今の課程は、実に残念だと思います。生命の神秘というものを体得させることがなくては駄目ですね。そういう面白味をキャッチしながらいく、そういう習慣が、幼稚園児に対しても出来るのではないかと思うんです。

\* \* \* \* \*

私、三つの男の子の孫が可愛くてね。今来ているんです。庭にいたカタツムリ、この間、雨がシトシト降っている時にとつてやったら、とつても喜んじゃってね。「どうしてはうの？」はっている所を見て、とても喜んじゃってね。私も喜んじゃってね。子どもが「どうして上手にはうの？」ときかんに質問を出すから。ガラスの上にはわせたんですよ。そして下から見せたら「あんだよ、変なあんよだね」そこまではいいんですよ、それからびっく

りしちやっただんですよ。カタツムリ、アワビの類がはうというの  
は、理科の方では、腹足といって、腹足の動きは、筋波によるも  
のだと説明されているんです。筋波というのは筋肉の波なんで  
す。ガラスの上では、明暗のしませんが、ずっと移動するのが見える  
んです。三歳の子どもに筋波の説明してもわかるはずもない  
し、興味もないけれど、そこで私自身が連想したことは、考えよ  
うによれば、三歳の子どもにカタツムリのはう不思議が感じられ  
るならば、大人には、もっと以上の不思議が感じられるはずでは  
ないだろうか。その不思議を、一体、小学校の先生、中学校の先  
生が感じているだろうか。

それから先は瞑想みたいなもので、私は、無限軌道を思い出した  
んです。カタピラー。今の交通機関は、自動車だって、電車だ  
って、車輪で走っているでしょう。車輪は道路があつてこそ走る  
んで、道路のない所では全然走れないでしょう。そこを走ること  
が出来るのは、無限軌道、カタピラーですよ。ブルドーザーだ  
って、戦車だってそうでしょう。くさむらがあろうと、道路がなく  
なろうと平気でしょ。動物には車輪はないんだけど、「はう」と  
いうことはある。カタツムリやアワビがはうのは一種の無限軌道  
を応用したものではないか。道路を持たない動物の動きは、木の  
枝であろうと岩の裏だろうと、どうにでも走ることが出来る無限

軌道が備っているのです。

人間がカタツムリのはう現象を見て無限軌道を発明したわけで  
はないのですが、カタツムリやアワビは、ちゃんと無限軌道  
と同じ原理にもとづいて動きまわっているのです。これはびっく  
りする。カタツムリもサザエもアワビもウミウシもアメフラシ  
も、みんな筋波で運動しているのです。岩の上だろうと海藻の上  
だろうと平気なんです。それを思い出して、自然はすばらしい発  
明力をもっているものだなあと思う。もちろん三歳の子どもには  
そんなことは言いませんが。人間は、行きつまったものがあつて  
無限軌道を発明した。しかし、動物は体の中で車を回すわけには  
いきません。

ウミヒラムシ、コウガイビルなどの動きは、同じ這う動物でも  
カタピラーではなくて、裏に無数の繊毛が生えている。原生動  
物のゾウリムシのように。その繊毛が交互に動いて、上から見る  
と滑らかに滑っているように見えるけれども、下から見ると毛が  
動いている。このはう仕掛けもまた、カタピラーに負けない不  
思議な運動の仕掛けということになるでしょう。しかもそれらは  
みな、下等と思われている動物たちの創意工夫によるものです。

(六月八日現職研究会の講演より)

## 自分への宿題



松 永 伍 一

またファシズムになっていくおそれがある、とよく言われる。なんとなくそんな気配もあるが、まったくおなじ状態が逆もどりするとはおもわれない。またおもいたくない。

流行のくりかえしならば、現実にはそれがあるから「あり得る」と言えそうだし、背広の襟の広さやスカートの長さは、時代と共に変化するものだから、三十年目にまったくおなじものになって「流行する」という現象もおこるのである。

しかし、背広の襟やスカートの長さがどうなるかと大してかまわないけれど、世の中が「悪い状態」に逆もどりすることは、困る。困るから、それを防ぎとめねばならないのだが、それは世の中の力でというよりは一人々々の力（自覚）にたよらないとできないことである。一人々々は小さい力にちがいないが、それが生きている人間の社会にあつては、もっとも大切にされねばならぬものだ。全体の力を期待するのはファシズムである。そのファシズムを排除するのに全体の力を借りるのは、かえって危い反動が約束されるようなものである。

私の生まれた昭和五年は、農村恐慌の時代で、百姓のくらしがもっとも窮乏したところだった。そんな時代がまたやってくるとは考えられないが、もし、それに近い「豊作貧乏」「娘の身売り」などがおこるとしたら、それにどんな対応策を出せるか、はなはだ疑問である。いずれ近いうちに食糧が不足し、地球上に飢餓がやってくるだろうと予言している学者もあるくらいだから、そんな事態が起つたとしたら、文字通りの「終末」がやってくるわけである。

\* \* \*

そんなことをときとき考えたりするが、このごろ子守唄収集の旅をしているために、老婆の話とそのことが合致することもある。『ああ、また飢えもくりかえすことになるか』との実感を持たされる。

「オラ、こがえに人の知しやね難儀ば、かぶつて来たたて、今の人達ア、昔の人ア、馬鹿なもんだぞ」って、一言で片付けっぺげんと、こがえに馬鹿ばみた人ア有ったさえて、今も村ア

有んなでねエベが？　って、オラ、我アの気持ちば強ぐして、鎮めてるモ。

昔の小作人なの、みな無くなつて、今ア良え世ン中えなつたもんだズ。若い人達ア、一人で大人えなつたみでエな氣イしてヨ。

この頃ヨ、昭和初め頃にはやつた、職にあぶれて、日が暮れて、花の都のすみまでは、いつになつたら、花が咲くッ”って云う唄ヨ、又のはやり出すみでエで、オラ、小娘の頃は思ひ出して、嫌きらなくなるズヨ。”どうかどうか、昔さだけは戻んねで呉ろ”って、オラ、一心えなつて祈つてるズ。

こえづア、ミミズグ（みみず）の心配みでエらもんだかも知んねエズモ。この地球の上は食い尽したら、あと、どうすんべエつてナ（筆者編著『歴史をふまえて』三一書房刊）

これは山形県最上郡のある老婆の語らいの一節である。この人は、昭和九年の凶作のとき、十六歳で新潟へ娼婦に売られた体験者である。普通のとときでも、田一反から五、六俵しかとれないのに、冷害で半作となり、その上小作とぎているから、食いぶちを減らすためにも、働ける者を外に出さねばならなかつた。娘は、とりわけ重宝がられた。女衞メヅルという周旋屋が暗躍し、貧しい家の娘たちは娼婦への道を急がされたのだった。

この老婆は、「どうか、どうか、昔さだけは戻んねで呉ろ」と言う。そう祈っているのである。自分がなめた経験だけは、多くの人になめてもらいたくない、そんな時代がふたたびめぐってくるのではないように、と念じている。この人にとって、もっともおそろしいのは「くりかえし」である。つまり、悪いことが、他人の上にあぶことを怖れているということ。さらに言えば、歴史は逆もどりしてはならないと、歴史学者でない一人の老婆が祈っているということは、すばらしく、貴いことである。

私は、この語りに接したとき、深く感動した。ここに、すぐれた人間がいるとおもったのである。日ごろ、えらそうなことを言っている人だつて、自分のやってきたこと、やらされてきたことについて、心が痛むような反省をしているとは限らない。過ぎたことはもう仕方がない、と言ってしまえば万事片づくとおもいこんで、そんなふうな「水に流すように」処理していく人が多い。その人は、自分に対しても責任を負おうとしない、とみられても仕方がない。しかし、この種の人がいかに多いことか。

中国の詩に「年々歳々花相似、歳々年々人不同」というのが



ある。これは毎年々々、花は同じように咲くが、それにひきかえ毎年々々人は変化していく、という意味である。自然はつねに繰返しているが、人間は生命の終りにむかって刻々と歩んでいるという比較は、実によくわかる。おそらくこれも真実である。人間は、毎日々々同じように、起きて、食事をして、排泄をして、寝る……という繰返しのために、幸福を味わったり、不幸だと悲観したりすることに馴れてきた。これは「くりかえし」の自覚の上に、幸福も不幸も重なってくるということなのだが、本当の幸福をつかむことは、こんな他力本願にもとづいていると言いきれないのである。

流れるように生きるとか、単純に繰返して事をすませていくところに、手ごたえのある幸福は生まれて来ないのでないか。幸福になるためには、自分に対するきびしい宿題を課さねばならない。たとえ不幸になっても、その不幸の本質をつきつめていくことは、幸福になるために自分に対するきびしい宿題を課すときの態度と、決してちがわないとおもう。

宝くじに当たるといった偶然は、たしかに幸福をもたらすだけれど、これは一瞬の、たとえば大空の花火のようなもので、大金は残るかもしれないが、心の充実は永つづきしない。幸福は自分の手をつかみとるものであり、「くりかえし」のマンネ

リズムのなかからは、そう易々とはいってくるものではなさそうにもおもえる。

ただ、「くりかえし」が必要なものは、すばらしい内容の幸福をつかむため、あるいは自分自身を大きくつくりあげるために、執拗に問うていくときだけである。執拗に問うということは、「くりかえし」によって意味を持つし、よい成果をもたらす。それはたしかである。こういう「くりかえし」ならば、決して避けてはならないはずである。ということは、自分への宿題を問うことは、つまり、その問いを執拗に繰返すことに他ならない、ということだ。

\* \* \*

私は、時代が逆戻りしたり、悪い状況がふたたび繰返されたりすることのないように、ひそかに祈っているし、「くりかえし」の怖さやときどき考えもするが、そういう事態に至らないようにするために、自分一人々々が、人間のあり方、歴史のあり方を問うていくしかないという信念を持ちはじめている。

一人の力は小さいが、小さな真実が集まると強いということもまた、信じていいようにおもう。それは幸福になるために自分への宿題をきびしくしていくことと別のものではない、という発見でもあるのだが。

## 幼児の供述心理（その二）

池田義徳

つぎに幼児の心理的発達段階を概観すると、

- (1) ④ 知覚の発達について幼児はすべての事物を人間の相貌においてもとらえようとするところに特徴がある。自我体制の未分化から生きものと無生物とを区別することができない。ピアジエは次の四期に区分した。

第一期は四―六歳の時期ですべてのものを生命ある意識あるものとして考える。

第二期は六―七歳の時期で動くものはすべて精神をもったものと理解される。

第三期は八―十歳の時期で、自分の力で動くものと、他の力で動くものとの間に本質的な区別ができる。

第四期は十歳以後で植物と動物または動物のみを、意識をもつたものと理解する時期。

⑤ 空間知覚としての位置、距離と遠近、形の弁別力は四歳頃から発達するといわれる。とくに三―五歳頃までは色に多く反応し、六歳以後は形に反応する傾向がある。同形同大の重量の

異なる二物体の弁別能力は六―十歳頃までに、色の濃淡は八―十七歳頃まで発達する。

⑥ 時間知覚は八歳頃を基準にして、それ以下の幼児は等時性の観念がなく、時間と速さとの反比例関係も判っていないから時間測定はきわめてむずかしい。

(2) 再認による記憶は三―四歳頃から顯著に、三歳以前は主として具体的な形のあるものに限られ、それ以後になると抽象的な無形の事柄が記憶痕跡の場に入り、四歳になると分化は著しい。また特に幼児の想像性は現実との未分化性と判断の未分化性とから典型的な想像生活時代ともいえる。さらに学童期は直接記憶の著しい発達、青年期になって論理的記憶へ発達する。

(3) 幼児の思考判断の特性は自己中心的思考で、いわゆるその場限りで意識化の困難性、客観的な関係判断の欠如、統一や連関のない混濁性にある。そして論理的思考への発達過程は第一段階六―八歳以前で、いわゆる未分化的融合的であって知覚、情緒と不可分に結合し、時間・空間を超越して前提から結論を導

き出すことができない。第二段階六—八歳より十一—十三歳まで、はじめて論理的思考の可能、しかし情緒的色彩が強い。第三段階は十一—十三歳以後で、主観から離れ客観的に推理しうる青年期に。

(4) 知能については、大体十一歳—十二歳頃まで直線的に上昇、その後の上昇はやや緩慢となり十八歳頃頂点に達するといわれている。知能の発達には著しい個人差があり、知能検査により知能率は比較的恒常であるといわれ、満一歳からでも実施可能である。

幼児は、知能の発達段階に応じた範囲内の事柄であれば容易に理解し答えることができる。ただ関連と秩序のある叙述をするところが非常に難しいし、また用語の上でも精確な呼称を知らない。しかし簡単な構造の事項については、十分適切な、かつ非常に重要な答が期待できるものである。もしこれを誤れば当然困惑し、混乱して黙ってしまうか、間違った答しか得られず、極度に非合目的な緊張を作り出すだけである。それだからといって幼児に弁識能力がないとして、その幼児が「証言能力」を欠くと速断してはならない。子どもの供述能力には著しい差異があるけれども、誰一人として供述無能という者は実験結果からもない。ただある

特定条件においては、供述無能を意味するにすぎず、一般的に供述無能であることを意味しない。子どもの平均的供述有能性という大胆な概念を作ってみると、それは批判能力 ( $r=0.65$ )、総合能力 ( $r=0.59$ )、言語熟練 ( $r=0.53$ )、学業能力 ( $r=0.51$ ) に、積極的相関関係がある。では子どもが何歳から供述能力があるかは個別、具体的な問題で、レデニッチは三歳六か月の幼児から、ミューラーヘスとナウは一九三〇年に三歳と四歳の子どもからと記録している。今日多くの意見によれば、有利な事情の下では「二歳ないし四歳の幼児」でも、信用性のある供述ができるとされてくる (Erhardt und Villinger, 315; 同旨 Nau 1962, Geister 1959, 22)。

## 二 供述の信憑性

「供述(証拠)の信憑性」はもとより「証言能力」と異なるもので、ともに個人に関する個別具体的な事柄ではあるが、証言能力は、個人の証人としての資格の問題であり、供述の信憑性は、証言能力の認定の場合に比し、より一層具体的・個別的に事案に即して、供述者の能力、人柄、立場、利害関係、供述態度、供述内容、その他諸般の事情により決定される証拠価値の問題(人についていえば、その人の信用性・正直さ、供述内容についていえ

ば、その眞実性・正確さである。このように両者には觀念上判然たる區別があるが、現実には、ともに自由心証主義をとり、デリケートに相互に作用しあうことになって一般抽象論をすることは、あまり意味のあることではない。アメリカ法の下でも「許容性」(admissibility)と「適格性」(competency)と「信憑性」(credibility)とは、とかく混同されがちであるが、嚴格な意味では區別すべきであろう。

幼児・年少者の供述についても、もちろん証言能力とともに、その信憑性が吟味されなければならない。そこで一般に成人の供述に比して信憑性が薄いという科学的・法則的なものはない。場合によっては幼児の供述のほうが信憑性の高いこともある。リップマン(一九〇五年)は「法律家のための心理学提要」の中で次のように詳述している。「事情によっては幼児供述の方が成人供述よりも信用できることを、見逃してはならない。幼児は往々或種の出来事につき、成人よりも平靜な観察者である。たとえば幼児は無関係の傍聴者兼傍観者として、二人の大人の論争に居合わせる時、事件がもつ本来のより深い意味を理解できず、論争の情動強調にまき込まれない。それでこの際の幼児の知覚と追想は、他から影響されない間は、成人よりも客観的である。というのは幼児は、事情によってはこのような出来事にさいし、成人の

目撃証人ならば誰もが偏頗へんぱにならずにいられないような場面に出合っても、向背をいずれにも決めないからである」と。「しかし他面、幼児証人の尋問とその供述評価にさいしては、特別に用心するのが適當である」ともいつている。要は幼児の供述を事実認定の資料とする場合、その信憑性を弱める危険性の側に充分注意し、もって判断決定に慎重を期する態度がより望ましく肝要であろう。

以下本判決および従來の判例をみると、その内容はかなり幅広く漠然たるを免れえないが、自らの実験結果からも併せて一般化し得ると思われる主要な基礎的資料を摘記する。

(1)供述心理学的問診 供述眞否判断の手段として最も有効な科学的方法は問診である。つまり積極的判斷基準に合うような標識を供述自体の中に発見できる問診が最良の尋問方法である。それには問答法と報告法がある。両者はどんな概括的なものでも多少の暗示性を含んでいるが、それぞれには長短があつてその程度は問いの方式如何によつて著しい相違がある。いわゆる前者は発問を個別的・具体的に用いる場合で、問診者の知りたと思う任意の事項についての供述を得る利便はあるが、間にふくまれる暗示性からくる供述の錯誤を十分排除することができない。しかるに

概括的・抽象的任意に述べるのが後者で、ただ不必要な事項についての冗長な供述を我慢して聴かなければならない欠点と、当該必要事項が供述者の任意報告から往々にして与えられるという結果から事実上問答法が多く用いられるのもやむをえないことになる。

ただ、その問答法の使用に当たっては、常に暗示性の影響を念頭において、できるかぎり問式を工夫すべきである。つまり重要な事項については、報告法を主とし、問答法はただ補完的に用いることが肝要である。シュテルンやリップマンは欠点ある質問として暗示質問、とくに誘導尋問を、これは供述の信憑性を甚しく危くするものであると指摘している。

問診に際し、何よりも重要なことは、問診者と被問診者とのラポートを作り出すことである。人間はどんな事情の下においても、面接者が明らかに何も知らず何も理解していない事項については語り合うのを躊躇するものである。したがって稔り多い問診の基礎は信頼である。しかし信頼は、説得や作為で得られるものではない。それは信頼に値する態度から自然に生まれる果実である。そして信頼に値するための前提は理解と誠実である。問診者の役目意識、偽りの威光をかさに着て自分はどんな不真実でも見抜けるという態度こそ、被問診者の歪んだ心的状況と極度に非合目的な情動緊張を作り出すのみであることを充分留意すべき

である。

そして理解と誠実は意志疎通を前提とする。意志疎通の最も重要な手段は言葉である。この言葉は話し相手が使いなれていて、しかも双方が話せる言葉(単語)が必要である。供述者の知能程度に応じ、それにふさわしい事項について、ふさわしい問診方法により、答を求めようようにすることが重要である。

(2) 供述者の属性 知覚、記憶に関連して注意を完全に奪うものは、副次的・無関係などと考える所与物よりも良好・明瞭・強烈に知覚されるものである。特別注意を惹く所与物とは、何らかの形で個人的重要性あるもの、つまり何らかの方法で欲求・努力・願望・希望・危惧しているもの、実存的に「特徴ある」ものの、何か「重要な関係ある」もの、内面の中心域に「触れる」ものである。

人間の知覚生活を支配する法則的なものの中で、供述との関連で特に重要なものは、「簡明化傾向」と「常態化傾向」である。これは、体験したことを主観的範疇として「類型的なもの」・「蓋然性あるもの」・「意味深いもの」・「予期するもの」の意味に体験する人間共通の傾向である。また記憶としての追想は時間的経過とともに「薄らぐ」ことは、一般的通則で、量的にも質的にも変化する

る。それは「簡明化」「常態化」の傾向としての記憶の虚隙を補完する。そこに供述誤謬が胚胎するともいえる。この記憶消失現象は、その現在量全体につき均一に生じるわけではなく、とくに強い感情と結びついた体験は、すべてこびりついて離れないのが普通である。とくに幼児は個々の出来事の順序を精確に述べることは全く困難であり、時間的関係の供述も不確実なことが多く、事件の場面々々の持続時間は特にそうである。

犯人の外見についての人物描写は往々不完全、不正確であり、証人が数人いる場合には互に矛盾することが多い。また感じて体験される全体の質と客観的個別事項とを区別すべきで、全体の質は人物体験においても主導的であるように、人物描写は全体の質において正しくとも、個別事項においては間違っていることがありうる。そのような場合でも、全体の質に充分の特殊性と特徴性が見えれば信用できる。色彩に関する供述はとくに信憑力に乏しいことは世界的通則である。それよりむしろ形状の方に確実性が多く、年齢・身長もあまり信頼できない。したがって証人が犯人を再認しなくても犯人でない可能性があるだけで、犯人でないとは断定はできない。それは客観的、即事的、個別的体験の主導か、或は感情的な全体印象が体験を主導しているかによる。それ故選択面通しの状況は、心理学的に充分審究しなければ

ならない。

幼児の反応は当為即答的におこなわれるのが普通で、そして客観的事実に関係なく、同種の事項について同一の答を反覆する固執傾向が強いことと相まって語いも貧弱で、言葉で精確に現わす適当な表現を知らない。さらには幼児の主観的思考に加え、供述に空想・想像性に富むものである。つまり現実の体験からはその素材を汲み取るだけでその主題も意味内容も汲み取らないような「全く空想的な創作」が起ることさえ、計算に入れねばならない。

(3)供述態度 幼児においては、真実への良心と、虚偽供述のもたらす影響の範囲の洞察とが、あまり発達していない。そして虚言する動機の可能性の範囲も小さい。強いていえば、自分自身を保全しようとの、また家族を刑罰その他の苛酷な不利益から保全しようとの願望である。虚言の頻度は当該人間の置かれた社会的状況に非常に強く左右されるものであり、パーソナリティに重大な関係をもつものである。

実際子どもは社会的にも無経験であり、はっきり特定した利益を追求できる場として、つながりのある生活領域の数も、まだ少ないところから、客観的事実を忠実に述べるつもりで誠実になされた供述であっても、知らない間に自己の内因的な主観が混入す

る原理から、そこには多くの誤謬を含むことは疑いをいれない。したがって客観的に同一な対象をほぼ同一の条件のもとに観察した数人の証人といえども、その各証言は重要な部分についてさえ、しばしば不一致をきたすことになる。こういう不一致のあることがむしろ当然の現象で、完全な一致はかえって虚偽的作為であることが多いということを強調しなければならない。次に供述活動中の表出現象即ち顔面表情の現象・身振り表情の現象、発言表情の現象に注目すべきである。レオンハルトは種々の論文において、供述者の態度に影響を与え、それによって受け入れられた反応を心理学的に評価できることに注意を促している。純粹に解すれば唯一の虚言徴候というものは存在せず、ただ不安定、緊張、認識の諸現象が存在するだけであるということである。また、より深い人格層に帰属する音響像、いわゆる発声は、真実の場合にはより自由で無理がなく、よい響きで、抑揚に富むのが常で声はより力強く新鮮で、呼吸はスムーズである。不真実な場合には声が圧しつけられ、音の高さと声の強さは、精彩がなく、弱々しいかまたは作爲的に上ずっている。呼吸は詰ったりとぎれたりして、発声が時により低くなったり、かん高くなったりする。

最後に用語の問題で、供述が、描写形式と言葉使用において、供述者の年齢・知能水準・教養程度に符合するかどうかである。こ

れが符合しなければ、外部からの影響が確認されるものである。

## むすび

以上基本的考察をしてきた通り、これが裁判問題に関し、調査者の期待に添う腹藏のない真実に符合する供述が結局得られるという意味での成功がもたらされるかどうかは、もちろん不確実ではあるが、それでもこの努力が、心理学者の任務が無駄になることはほとんどない。むしろ今日その心理学的能力を要求拡大されてきている。つまり心理学者はできるだけ真実解明の科学的採証に協力すべく追加的に命ぜられているものと考えられる。将来科学的採証法則が確立され、その拘束下に自然法則的な確実度で裁判の事実認定が行なわれることになるかも知れないが。

刑事訴訟法における専門家の活動の成果は、もはや信用できない供述をそれとして立証して無実の者が有罪とされる危険を防ぐだけにあるのではなく、すんで告訴の内容が真実であることをも立証できることが多いであろう。そしてそれにより、一方では、不法を加えられて犯罪の被害者となり、犯罪につき真実の供述をする者が信用されて正当な権利を獲得するのに寄与し、他方では、罪ある者が当然の刑を受け贖罪と矯正に服させられるに寄与するであろう。(おわり)

(順正短期大学)

☆倉橋賞受賞論文☆

幼児の遊びに働く認知機能の条件分析的研究(その二)

利島保

結 果

一 創造的想像と遊びの関係

創造的想像の反応は、用途テストの反応によって測定された。用途テストによって得られた反応の内容は、二分類して考えることができる。すなわち、対象の本来の使用法にふれた反応(例、紙タオルでコップをふく)を標準反応とし、それ以外を非標準的反応として整理した。表2は、用途テストにおける総反応数に対する非標準的反応の占める割合及びその粗数について、遊び群、模倣群、コントロール群の三条件についてみたものである。

表2からもわかるように、第一回、二回の用途テストとも遊び群、コントロール群、模倣群の順に非標準的反応が総反応数に対して占める割合が大きく、特に、第一回のテスト反応において顕著であった。第二回目のテストでは、三群とも非標準的反応の

割合が増加している。これは三群とも遊び条件を経験した効果が考えられるが、模倣群の相対反応数が第一回目のコントロール群のそれ以上に上らないという点では、模倣群の模倣経験の残効が十分考えられよう。

用途テストにおける三対象に対する標準・非標準反応をこみにした平均反応数を三条件について示したのが図1である。

三対象について一貫した傾向はみられなかった。また、これらの反応数を被験児個々についてZ変換値に

表2 用途テストにおける非標準的反応の出現率 ( )内粗数

群	第1回用途テスト	第2回用途テスト
遊 び 群	97.8% (90)	98.0% (97)
模 倣 群	70.8% (64)	80.0% (92)
コントロール群	85.6% (83)	93.6% (117)



修正し、2 (用途テスト、一、二回) × 3 (遊び、模倣、コントロール群) × 3 (紙タオル、マッチ箱、クリップ) の三要因分散分析を行なった結果、用途テストの主効果 ( $F \parallel 6 \cdot 67, df \parallel 150 / 27$ ) に1%で有意差がみとめられた。また、条件群×用途テストの相互作用 ( $F \parallel 26 \cdot 67, df \parallel 2 / 27$ ) が1%で有意であり、用途テスト×条件群×対象の二次の相互作用 ( $F \parallel 3 \cdot 0, df \parallel 4 / 45$ ) も5%で有意であった。このことから、表2における結果と分散分析の結果がほぼ一致し、用途テストの第一回目の反応数が条件によって差異のあることも統計的に支持された。

図2は三対象についての平均非標準反応数の用途テストによる推移をみたものである。これからもわかるように、第二回目の用途テストにおいて、非標準反応が多く出現している。また、模倣群の反応推移は、他の二群に比べて変化がないことも認められた。

## 二 性差と創造的反応の関係

各条件群ごとに非標準反応の平均値についての男女差をみると表3のようになる。すなわち、第一回の用途テストの遊び群において女兒の反応数が男児のそれより多い他は、男児の反応数が女兒より多かった。

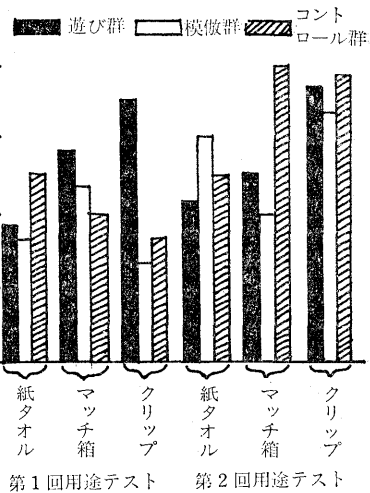


図1. 用途テストにおける各対象の平均反応数反応数の比較

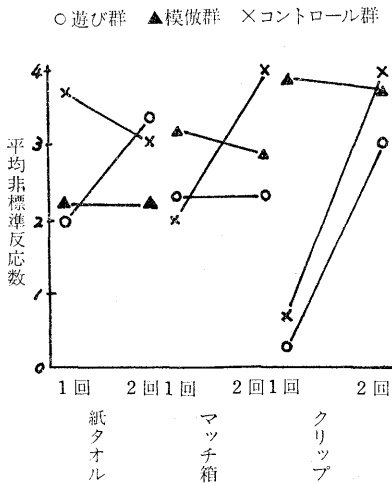


図2. 各対象に対する非標準反応のテストセッション推移

表3に基づく3(条件群)×2(男女)×2(用途テスト)の三要因分散分析の結果からも用途テストの主効果、条件×用途テストの相互作用が有意であった他に、性差の主効果( $F_{11} = 28.6$ ,  $df_{11} = 29$ )も1%水準で有意差がみられた。

### 三 自由遊びでの活動と用途テスト、条件効果について

実験計画における第三セッションでの幼児の自由遊びでの活動をVTRに記録し、それに基づいて、各対象を幼児が手にしていた所要時間を五分間の制限時間で総計したものを個人毎に求め、その値と第二回目の用途テストの個人の反応数との相関をみたところ、クリップについては、 $r_{11} = 0.46$  ( $df_{11} = 28$ )で1%水準で、マッチ箱は $r_{11} = 0.21$ 、紙タオルは $r_{11} = 0.31$ で5%水準でそれぞれ有意な正の相関値がえられた。このことは、対象を操作することを多くしたもののほど対象に対する創造的想像性が高い傾向にあることが示唆された。

次に、対象所持時間と用途テストの反応数を三条件群ごとにみると、遊び群で $r_{11} = 0.54$ の5%水準で有意な相関を得たほかは、模倣群 $r_{11} = 0.32$ 、コントロール群 $r_{11} = 0.16$ と両群とも有意な相関値ではなかった。このことは、遊び群の活動性が、創造的想像の促進に効果をもつことが示唆されたといえよう。

表3 非標準反応の平均反応数の男女比較

	用途テスト 1回目		用途テスト 2回目	
	男児	女児	男児	女児
遊 び 群	8.6	9.4	11.2	8.2
模 倣 群	7.6	5.2	10.8	7.6
コ ン ト ロ ー ル 群	9.4	7.2	13.8	9.6

五分間の自由遊び期間において被験児が二つ以上の対象を同時に操作して遊んだ回数一分を一区切りとして、五回中何回生起したかを各条件群ごとにみると、表4のようになる。この表には、二つ以上の対象を幼児が操作した時期を五回に分け、その五回中の生起率を実数値で示したものである。また、五分間中に一度も二つ以上の対象を操作しなかったものは除外した。

表4より、各群の二つ以上対象を操作した活動の生起率に差があるか否かを、マンホイットニーの $u$ 検定を行なったところ、遊び群と模倣群( $u_{11} = 31.5$ ,  $n_1 = 6$ ,  $n_2 = 9$ )、遊び群とコントロール群( $u_{11} = 30.0$ ,  $n_1 = 5$ ,  $n_2 = 9$ )の各群間で2%水準で有意差がみられ、模倣群とコントロール群間では有意差がなかった。このことは遊び群が対象物を自由に操作する活動の可能性が他の群より高かったことを示している。

表 4 第3セッションで2つ以上の対象を操作した活動の生起率と人数

遊び群	模倣群	コントロール群
1.0	0.4	0.6
0.2	0.8	0.8
1.0	0.4	0.8
0.4	1.0	1.0
0.2	0.2	0.6
0.8	1.0	
0.4		
0.4		
0.6		
N = 9	N = 6	N = 5

(注) 1.0とは5回中5回2つ以上の対象を操作したことを示す。

模倣群においては、自由遊びのセッションで、対象を自由に操作して遊んでよいと教示されたにもかかわらず、模倣活動を再現したものが、男児一名、女児5名全員であり、このことから、模倣の先行経験がこの群の被験者の活動に大きな影響を与えたことが示唆された。

## 考 察

本研究は、ピアジェの遊び理論すなわち、同化と調節の二つの相補的メカニズムの均衡モデルの検証という立場から、遊びに働く認知機能の条件分析を行なったものである。

結果に示す通り、遊び群、模倣群、コントロール群における創

造的想像の出現は、幼児の先行活動経験によって異なること、また、遊び群における活動内容も、模倣群のそれとは異なり、対象を自由に操作するという同化のプロセスが優勢に働いていることが示唆されると同時に、模倣群が自由遊びに入った際にも、先行経験による調節のメカニズムが優勢に働き、模倣活動の再現をすることもみられた。

次にプレイフルネスと創造的想像の関係については、幼児の遊びと模倣活動が、認知的連想の流暢性にかかに影響するかを、対象物を遊びの道具として使用する方法を幼児に求める用途テストの反応内容からみたわけであるが、その結果、自由遊びによって対象を自由に操作することは、模倣により制限された対象の操作によるよりも、用途テストの反応内容にバラエティに富むような効果を与えることがわかった。この点については、サットン<sup>(9)</sup>とピアジェ<sup>(7)</sup>の仮説を支持している。遊びの効果は、第二回目の用途テストの反応数が、一回目のそれよりも多くなっていることから、自由遊びが、統制的活動による影響を消去したことが示唆された。

本研究における遊びの効果から考えられるもう一つの点は、遊びが環境における有効な手掛りを幼児に気づかせるということである。ワラックは、より広範な注意を環境に対して向けること

が、創造的想像を促進する要因の一つであることを示唆し、ワー  
ド・W<sup>(12)</sup>は幼児の環境認知の能力による創造性の成績の差異を検証  
している。本実験においても、このような点を結果が支持してい  
るように思える。

創造的想像と性差については、その原因は明確にできなかった  
が、その遠因としては活動性の内容に基づく認知スタイルの差が  
あると考えられるが、この点は遊びにおける重要な問題であるの  
で、今後十分検討を要する。

本研究は、遊びと模倣の是非を問うたものではなく、認知発達  
に大きな力をもつ幼児の活動という枠組の中で、この二つが相互  
に関係しながら、認知発達を促進することは、自明の理として認  
め、認知発達の中で作用する遊びと模倣の機能の仕方の違いを明  
らかにしたものである。

ダンスキー・Jとシルバーマン・I<sup>(2)</sup>とは、本研究と同様の結果  
を得ているが、彼らの研究では、先行経験として自由遊びや模倣  
が、用途テストの反応内容に及ぼす効果のみから取り上げたのに  
対し、本研究は、幼児の実際の活動内容に、ピアジェの遊びの仮説  
がみられるかを検討し、さらに、それらと幼児の創造的反応との  
関係をみた点に、本研究の利点があると言えよう。したがって、  
遊びと模倣の認知発達への機能の仕方が、発達のみにてどの時期

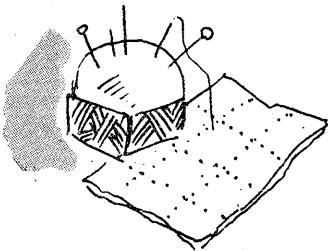
にどのような事態で生起するのかを今後検討していくことも重要  
なポイントである。

(本研究は、利島保の昭和四十九年度科学研究費、奨励研究(A)、  
課題番号九七一〇二六に基づく研究の一部である。最後に本研究  
の資料収集に協力いただいた福元久美子さんに感謝いたします。)

## 引用文献

1. Almy, N. 1967 Spontaneous play: An avenue for intellectual development. *Young Children*, 22, 265—276.
2. Dansky, J.L. & Silverman, I.W. 1973 Effects of play on associative fluency in preschool-aged children. *Developmental Psychology*, 9, 38—43.
3. Feltzson, D. 1972 Developmental imaginative play in preschool children as a possible approach to fostering creativity. *Early Child Development and Care*, 1, 181—195.
4. Lieberman, J.N. 1965 Playfulness and divergent thinking: An investigation of their relationship at the kindergarten level. *Journal of Genetic Psychology*, 107, 219—224.

5. Piaget, J. 1952 *The origins of intelligence in children*. New York: International University Press.
6. \_\_\_\_\_ 1962 *Play, dreams and imitation in childhood*. New York: W.W. Norton and Company.
7. \_\_\_\_\_ 1966 Response to Brian Sutton-Smith. *Psychological Review*, 73, 111—112.
8. Singer, D.L. & Runmo, J. 1973 Ideational creativity and behavioral style in kindergarten-age children. *Developmental Psychology*, 8, 154—161.
9. Sutton-Smith, B. 1966 Piaget on Play: A critique. *Psychological Review*, 73, 104—110.
10. Sutton-Smith, B. 1967 The role of play in cognitive development. *Young Children*, 4, 59—79.
11. Wallach, M.A. 1970 Creativity. In P.H. Mussen (Ed.), *Carnichael's manual of child psychology*, Vol. 1. New York: Wiley.
12. Ward, W.C. 1969 Creativity and environmental cues in nursery school children. *Developmental Psychology*, 1, 543—547.
13. Vygotsky, J.M. 1967 Play and its role in the mental development of the child. *Soviet Psychology*, 5, 6—18. (天津大学)



## 最近の本から

津 守 真

最近、私が、感銘深く読んだ本の中から、おこがましいけれども、感想をのべて紹介したい。

その一冊は、鈴木とく著「感傷はいく野迷いあるき」（全国社会福祉協議会、昭50）である。鈴木とく氏は、保育所の保母として長年現場で子どもたちとはたらいでこられた方であるが、東京の下町の戦前の託児所の実態を背景に、保育者としてそこで取り組んでこられた体験をもとに書かれた自伝である。実際に生きた体験をそのままに思い起そうとし、そのことの意味を、現在もう一度問い直そうとしておられる。それが壮年期のほとんど全体を蔽うような長い期間にわたっているものであるとき、（ここではその最初の部分であるが）読む者にとっては、限りのある人間の一生を土台にしたものであることを思い出させられて、ひとごとでなく、一しょに迷い歩きをさせられてしまう。著者は序文で、「私には、保育の目的がほんとうにあったのだろうか」と自問される。むしろ、「行きあたりばったりの、歩き方といったほうが適切かと思う」といわれながら、全編を貫いているものは、本

当の保育を求めて歩いておられる保育者の姿のように私には思われた。「さまざまな生活指導が、主軸であったような私の保育の、反対側では自然からの情感を、いつも考えていたように思う」といわれる、この二つのテーマが繰返しあらわれる。著者は、この迷い歩きの中で、挫折しきずれおれそうになるとき、「私の気持に『さあ！』と意志する何かをもたらしにくれたのは、子どもたちの、あの、さ青な瞳と、透きとおる声と、それにも増して生命の息吹きだった」（P・5）といわれるのは、今もそこを出発点として考えておられるのである。「どの子どもにも、その顔が異なるように、ちがう気持が宿っている」。その気持を察してやりたいと思っても、「なかなかしっくりいかなかったり、それより先に、吾が願っただけが、あらわに子どもに向けられたりする」（P・7）

「保母という職業意識を持つことは大切なことだが、それに縛られてしまうと、自分は何とも思っていないのだが、相手を、その意識で縛ってしまうことが多い。」この二つのことを、いつも大切に、常に反問的に自分に問いかけていたいと思う。」と述べられる。これは、続いて記してゆかれる帝

大セツルメント、浅草玉姬方面館、高橋方面館での地域社会の問題をかかえる中で保育の中に流れている若者の保育者精神である。貧しい地域の託児所の裏庭の陽だまりで、数人の子どもたちと腰をおろして子どもとしゃべりながら何かをしている写真（P・41）は、この本を象徴するものの一つである。

若い保育者に対して、それと同じ体験を経て、更に大きな眼でその体験を見直している者として、温い思いやりをもって、陥りやすいあやまちを指摘してあるところが各処にある。それができるのは、つまるところ、それを自分自身の反省としてとらえておられるからであろう。ある時期の自分の保育を、枠はめ、保育もいいところだと述べ、「その当時は、せつかにこうなってくれああってくれと望んではないなかつたにしろ、仕事に熱を入れると、せつかにになる」（P・21）と指摘される。年少組二五人を一人で食事の面倒を見ることの大変さを述べ、「全体の統制がいつも、この小さな子どもたちに破られてしまい、他の子どもに落着かないものを感じさせる」という当時の手記を引用して、「今の若い人も私の若い時も、若い時はなせ、全体の統制だけが気になった

のだらう」（P・46）と指摘される。そして、「私など、やたらに統制したくないという考えにたどりついたのは、随分とあとのことである」と控えめに、自分のたどりついたところを述べられる。

私は、もう十年以上も前に、著者が園長をしておられた保育園に見学に行ったことがあった。（それはこの本の時代からは、ずっと後のことであるが）園長であった著者が担任の保母さんに、えのぐをもっと濃くときなさいと歯切れよくって、しかもそこには温かい自由な雰囲気漂っていたことを印象深く覚えていた。そして、この本の中で、「詩を失うことは悲しいことだ、私は子どもたちといながら、詩を喪いかけている。……託児所は楽しい所でなければ……。毎日彼らは家で叱られている。遊び、その中でいろいろな訓練ができないで、子どもがさわいだり、いわれたことを守れないと叱ったところでどうなるだろう。あしたこそは、楽しい一日を、どなったり叱りつけたりしない一日を過したいと思う。」（P・284）というような文章に出会うとき（こういう個処がたくさんある）、あのときの保育の底力になっていたものを、この本の中であらためて見せて頂いたように思う。

橋詰良一 著

「家なき幼稚園」の主張と実際  
より(十二)

第二十六 幼稚園の一般化

私の子どもの国の企ては、一面からみて幼稚園の一般化といえましょう。別の方面から眺めた幼稚園案、または子どもの国の案を、ちょうどこの書の起草中に大阪毎日新聞へ寄書したのがありますから、参考にごこへ採録しておきます。

実をいえば、私の幼稚園はこの趣旨によって、全然一般女性団体の共同作業組織に変更してもよろしいのですが、女性団体の事業として幼稚園を経営する意味とは大差のあることを申添えて置きます。(以下抜粋)

▽若き女性と幼児の結合

私は、今ほんとに敬虔な心持ちで、清い、美しい、楽しい、そして永

久的な実事業の一案を女性界にすすめたいと思います。

女性界の中でも、特に或組織を持った女性団体―処女会、女子青年団、婦人会、学校母姉会、女子同窓会、女学校々友会―はもとより、立入っていえば現在の女学校にも一顧を得たいと願っている私案です。

娘と幼児の接触、これが本案の第一歩で、また最後です。要は「むすめ」という時代の若い女性と「幼児」という時代の児童とを相触れさせようというのです。

婦人会の仕事といえば、講話か講習、それも趣味の乏しい講話になったり、料理割烹といったような手技の習得を紋切型にしてみました。今の時代には、色彩の変っているだけでも一顧の価値があるとは信じてますが、特に昨今農村の研究問題になっている農繁期の託児所案を解決する一策としては、更に注意を喚起し得るものだと思います。

簡単な実行案 私の実行案はすこぶる簡単なもので如何なる山村、僻地でも直ぐに着手することが出来ます。

一、学齢以前の幼児を野や林に集めます。もちろん母姉に連れて来ても



らうのですが後は独りで一定の地に集つてもよし、また誘ひに行つてもよろしい。

一、幼稚園の保母のような仕事を処女会や婦人会の中の若い女性が受持つのです。

一、年長の婦人たちは、世話方になって第二線から後援をしますのです。

一、小さなオルガン、ござなどがあればよろしい。それを一定の集合地にする寺や社などにおいてもよし、小さな車で好きな所へ運んで行つてもよろしい。

一、そして、毎日(または或期日)林の下や、野の中を遊びまわらせておればよろしいのです。

これで何時でも出来るはずなのですが、いよいよそれを実行するためには、婦人会員の全体に向つて準備しなければなりません。

若い女性に出来るか 何も知らない(教育や保育について)若い女性で、果してこのような難儀な仕事が出来るとしようか。とは度々疑問を受けたことですが、出来ずとも出来ずとも、立派に出来ます。殊に、何も知らない若い女性だから出来ます。すなわち經驗という古い伝統や因習によって大人の欲求を子どもの世界に強しようとする無理解者よりも、純な若人が子どもには善き道連れです。そして純愛から起こる親切な扶掖には、老人の案じるほど放漫に児童生活を導かないだけの関心が自然に芽生えて行きます。接触の動機をさえ作つてやれば、自然愛を幼児に向つて燃焼させるところが女性です。愛の純なるを望めば望むほど女性の若く純なるものが望まれます。

女学生と幼児 私は同様の主張によつて、女学生自身のためにも、ま

た学校教育の効果を完成するために、女学生というお嬢さんたちの幼児と接触する機会を作りたいと願うものであります。大阪の市岡高等女学校同窓会の発起で、校内に幼稚園の出来たことは実に喜ばしいことだと思ひますが、特に自由に両者が接触して、両者の間に燃ゆる愛の白熱化の反映によつて女学生の心性浄化に影響するまでの機運の招来を望みます。

なるほど、女学校の教育科には児童心理もあります。家事科には育児科もあります。しかし私は、出来た子を育てる方法の考究よりも、出来た子の心理の考究よりも一歩先きに、子どもというものの貴さ、け高さ、美しさを理解させる急を感じるもので、人間としての幼者の眺めかたや児童愛の理解を閑却されておる女学校の教科に不満なきを得ないのであります。

要するに心理は学問です。育児は技術です。私のいう児童理解は宗教です。子どもを宗教するものでなければ遂に人間を宗教することは出来ないのです。

出来てからの子の育てかたは、子をわれと考えることの出来る母性愛によつて賢愚の別なく曲りなりにも成就されるが、妊娠や結婚に至つては、子どもを宗教する以前と以後とにおいて非常な差がある、これまた若き女性を幼児に触れさせて得ようとする祈願の大きな一因です。

## 第二十七 姉妹学校と娘の教育

私が子どもの国を中心にして児童愛へのいそしみを社会に波立

たせたいとする熱望は「姉様学校」という女性団体になってしま  
いました。

姉様学校とはいってませんが、学校でも何でもない女性の団体  
で、それが余り他の方面ではいってこない「児童愛」の理  
解のため、また一面には「生活美化」を高唱するため、いろいろ  
の会に誘導するのを異彩として、とも角も大阪自動車幼稚園創立  
の時代から始めかけたものですが、最も簡明に本会の趣旨を書い  
たものがあります。

#### 『姉様学校』という婦人会は

無邪気な婦人の集りです。悠遠な意義を持つ集りです。姉  
様学校はフロebel先生の母親学校を母よりも、もっと若い  
時代の女性たちから始めようと橋詰先生の趣旨から生まれた  
よき集いです。「児童愛」と「生活美」をモットーとする美  
しい集いです。

姉様学校は左の事業を致します。

- 一、児童愛を理解する為の催  
児童神性理解の会、児童と一緒に遊ぶ会、児童に関する社  
会施設を見て歩く会、童謡、童話の会等
- 一、生活美を高調する為の催

旅行会、行楽会、趣味をすすめる会、運動講座、新三絃講  
習等

一、雑誌「愛と美」の発行

以上を御覧下されば、会のアウトラインがとも角も知って頂け  
ると思いますが、清らかな趣味の生活に若い娘たちを導きなが  
ら、児童愛への感激に触れさせようとするのです。

会費も何も取らず、ただ端書によって結合しようと企てた会合  
ですが、堅実な人が五百人以上は今でもシツカリとつながれてい  
ます。(略)

#### 第二十八 苦悶集

分らな過ぎた最初の先生

私の最初に来て貰った二人の先生、相応にニコニコした優しそ  
うな先生でしたが、恐ろしいヒステリックな辞を時々振りまわさ  
れました。

初めから無干渉主義で任せ切って、おのずからの接触よりする  
光輝を見ようと望んでいた私は、出来るだけ抑損すると同時に園  
長と職員などという階級を自覚せしめぬよう極度の友人主義発揮  
に勉めて来ましたが、一か月もすると先生たちの剣幕が恐ろしい

ものになつて参りました。

「先生、いまだきオルガンは恐れ入りますネ、いかに貧乏幼稚園だといつても、小さなピアノぐらい買つては頂けないでしょうか」

「アー、またゴザですか。これを見ると、ほんとに乞食幼稚園の感じがしますヨ。どうか早く畳椅子を造つていただきたいものですね……」

こんな辭が毎日々々平気で繰返されるようになりました。実に初めの幼稚園は神の森と、オルガンと、ゴザと、休食用には絵馬堂のあるばかりでしたから無理ではなかつたでしょうが、私はこんな声を聞くごとに、ヤツと彫り上げた白木の神像に泥を塗られるような腹立たしさを感ずりました。私は尋ねました。

「貧乏幼稚園だの、乞食幼稚園だのという言葉は子どもの口から出るのですか、大人の口から出るのですか」

「若し先生の口からはかり出たものとすれば、子どもが信頼し愛敬している親たちを、その子の前で罵るにも等しいものではありませんか」

すると先生はいつでも笑つて、  
「マッ、またやられましたナ」と下品な態度で自分の頭を叩いたりなどされました。私はこうしてある淋しさを感じ始めさせら

れたのでした。

ヒステリックな人にありがちな、善過ぎるような機嫌の日に限つて、笑い笑ひまた叱られるかも知れませんけど……と前置きしては「貧乏、乞食」と口癖のように繰返されました。

新聞広告などを機縁とした、自由な自己推薦に意外の人材が求められると信じていた私も、この二人の先生だけには手古すりしました。

階級的の威圧によつてのみ職業業務の遂行を余儀なくせられて来た経験者に対して、急に純平等理想的を望んだのが誤りであつたかも知れないと思つてみたり、旧生活の習慣が抜け切るまでは詮方のないことかも知れないと考えたりして見ましたが、先生は依然として野の讚美者にはなつて呉れないのでした。

我が子を犠牲にしなければならぬのか

——略——

雀のお宿への大泥棒

私は籠に小鳥を飼つたり、箱に兎を飼つたりするよりも、出来ることなら鳩を放ち飼ひにしたり、深草にあるような雀の宿にしたり燕の宿にしてやりたいと祈つておりました。子どもたちのた

めに。

池田の宮の絵馬堂が傾いているので、有志の寄付で三間に四間という小さな集合所が出来た翌年のことでした。鳩を飼うとお宮さんを糞だらけにするというので遠慮して、その建物の棟へちゅうど雀のお宿になるような小さな穴を幾段もあげた巢になる宿を作ってやって「おっつけ雀のお父さんと母さんが幾つも幾つもやって来て、好きな穴をおうちにして、赤ちゃんを生むのヨ」と話してやりますと、子どもたちは大喜びで、毎日々々上を向いてはそればかりを待っていました。

と、可愛い子どもの願いを叶えるために、二番ひの雀が右の隅と左の隅の穴へ巢をつくって、朝から仲よく出たりはいったりしはじめました。子どもはもう夢中です。

そのうちに、小さな可愛い赤ちゃんの声がジーンと耳を澄ませると聞えるようになりました。私はほんとに嬉しくて嬉しくて会社への往きと帰りにもきまわって廻って来て、雀君を訪問していましたが、ある日来て見ると、二つの巢の穴がこわされて巢藪は無惨に引出されて、赤ちゃんも何もいなくなっているのに、ガッカリしました。

翌日になって、失望する子どもたちを慰める言葉もなかったのです。宮の前に建っている小さな家を守ってくれる人のないのを

見すました町の悪太郎が、桜から登ってこわしたのだそうですが、何でも開放的にしようとするわが子どもの国にも、サタンはしばしば脅かしに参ります。

そこらに作ってある砂箱の中へ小便をしたりするサタンもあるため、見るからいかめしい錠前を砂箱の蓋へかけなければならぬことになりました。

しかし、そんなことを請願巡査さんの考慮に入れて下さった話を聞いたこともないので、悲しいものです。

幼児を看板にしたり喧嘩の種にしては罰が当ります

ある婦人会の方たちが訪ねて見えて、是非とも、あなたの主義の幼稚園が作りたいから世話をして下さいとお頼みでした。私はいくども是に似た御照会やら御依頼をうけましたが、それに答えた時と同じように、この婦人たちへも明白に御答えしたのです。

「子どもを通じての御婦人たち、別の言葉で申せば、子どもごのみの御婦人には非常に真純な尊さを感じております私は、子持の母たちが集って幼稚園をなさるには賛成ですが、単に婦人会という団体が会の事業として幼稚園を選ばれることは絶対に反対です。そもそものお考えが、幼児というものを会の看板に用いようとするような不純さを含んでいると思われるからです。神のよう

な幼児を看板に乱用する恐ろしさもありますが、神さまを喧嘩の種にするような日が来たら、浅ましいいよりも、罰が当たりますから」

私はくりかえしくりかえし、此所の主意を論じておいたつもりでしたが、どうした聞き違いやら（わざと聞き違えた態度に出られるのかもしれないが）会員の初一念通り、会の事業として幼稚園が出来てしまつてあつたばかりでなく、私が園長になっておりました。知人の世話でもあり、断るよりもむしろ自分が幼児のための犠牲となつて、大人の紛争より起る影響を防御してやるのが忠実かもしれないと腹をきめました。そうして常に争いがちな女性の單純性（よき場合には單純美）を子どもの世界へ誘導して、包括的な社会の童心化に勉めて見ようなど考えて見ましたが、それは予想の通り駄目でした。開園式の最初から早くも厭わしき紛争が続発して、名誉欲の満足を自己の企望する点へ早めようとするような浅ましい争いが余りにも露骨なのに驚いてとうとう逃げ出してしまいました。

その後、同じような相談を引きもならず持ちかけられました。が、いつでもこの事例を話にして輕拳妄動をいまいました。すると、中には如何にも不満らしい顔つきで「君のために君の主義を宣伝してやろうとする親切が訳らないのか」といったような隠

語を弄する人があります。金を借りに行く人が、親切をさせてやるためだ、と豪語するのを聞きましたが、實際その人の心の底がそうかも知れないのだと考えると、私はいつでも感謝なしにはおられませんでした。そうして、何がなしに泣けて泣けて、仕方がない時がありました。

#### 子どもを撲りつづける或家なき幼稚園

ある地方のあるお寺に「家なき幼稚園」というのが出来ていますが、そつと見に行つて、呆れましたと知らせしてくれた人がありました。それは随分高い月謝を取つて置きながら、先生も何もないに、乱暴なお坊さんと、お内証らしい娘とが、子どもを集めてやがましいといつてはなぐり、真直ぐにしないといつてはなぐり、キヤッキヤ泣かせて、平気なんですから涙がこぼれました、という嘘のような事実を聞いて私はほんとに寒くなりました。

その人は真実わたしを思つてくれての話であつたのです。そして、これを防止するために「園名の登録をなさい」と強調されましたが、その親切を聞いてもまた寒くなりました。

#### 若い先生の責任感

若い女性の純情を極度に信頼し、幼児との接触による自然教養

の可能を極度まで強調している私にも、時として淋しさを感じさせられることのあるのは、この若き女性たちの責任感という点です。ほんとに家庭の如く、その延長の如く思われるほどに和やかな幼稚園であってほしいと願う心が、何事にも無干渉にする結果かも知れないのですが、ちょっとした病気にも直ぐ欠勤する、しかも無届けで平気でやる。これだけはほんとにほんとに長い間の私の悩みでした。それを責めるも訓えるにも造作はないのですが、そうして「職業義務」という辞に触れさせるのを恐ろしいように思っていた私は、なにも言わずに訓えずに、自然にその責任感に目覚めてくれる日が、何時かは来得るものだとばかり考えながら、ほんとにかすかな暗示でもって啓蒙を求めて来たために永い苦悩になったのかも知れませんが、遂には私をして法一章を作るの止むなきに至らしめました。それはこの純情者をして誤った自由(放縦)への道を急がしめないための老婆心から――休まねばならぬ余儀なき場合は、手づかえの起らぬように早く各園へ届けて下さいませーこんなことでも、言わなければならぬほど今の女学生が分らぬものでありとすれば、女学生の根本教養に欠点を持っているのではないかと考えました。

おしなべて、何事につけても「責任」ということが明確に意識されていないように見えるのを純情礼讀者としての私は今も悩み

にしています。

驚き入った周囲の無理解

何をしてでも当事者以外は大抵無理解者ばかりだと思っておれば差支えないのですが、私の仕事には余りだと思われるような無理解が露出されました。

ごぞを持ち歩いて、野や川べりでお弁当を食べるのを見かねて退園させた母アさんがありました。「どうも、ああしてゴザの上でごはんを食べて、乞食のように歩きまわらせたら、その兎の行末の運命が案ぜられる」というのでした。これで高等教育を受けた母アさんです。

また若い女性を私の責ぶのを見て「幼児の世話ばかりは年をとった人でなければ出来るものじゃありません」と訳もなく反対する老婦人の多いのに困られました。

また「あの園に入れると子どもの言葉が悪くなります」といつて攻撃する人が今も非常に多いのです。イヤな言葉を奨励するのではないが、子どもが互に友人として交遊する子どもたち、特に大部分の子どもたちの言葉を、悪いといたりする理由がないと信じている私どもは、決して夫れを厭(いと)はしいとは思いませんため、変れば変るままに捨ててあるのを、大人の名譽心から攻撃される

のかも知れませんが、偏固になって死ぬまで生れ故郷の言葉を移住地の言葉に随伴させて行く自由を持たない年取った婦人から見て、英語でも独逸語でも、その日から話し合う事の出来るほどフレッシュな敏感な子ども言葉つかいを嫉視するなどはオコの至りだと思いがち、私はこの無理解には悩まれています。

最も困るのは、私の園へ入れておる子ども親で、どうしても園へ来ず、園の主張も聞いてくれずに、失望したような声「何も教えて下さらぬ」「遊ばせてばかりいてもらっては馬鹿になる」といったような無理解な声を振りまわして退園させたりする人のあることです。

また、私の主張する「自覚、自省、自衛、互助、互楽を得させるための子ども同志の世界」を思ってくれずに、単に放任にまかせる誤った自由主義として批難される有識者の余りに多いことは悲しいです。

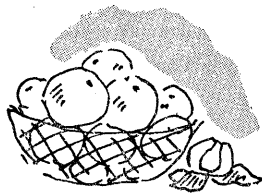
私がいなくなりでもして、私の気持ちの薄く薄くなって行ったときなど「ソレ見ろ」と毒づく人のあろう日を考えると淋しくなります。

会計ばかりを苦にして子どもを後廻しにばかりされるような委員さんがあっても、園長を雇人のように考え兼ねないような委員さんがあっても、事実一厘一毛の酬を求めていないから平

気で主張も通しては行かれるが、有給の園長でも来る日になったらどうだろうかと思う日もあります。

府庁から御呼出しがあつて「早く、認可申請を……」と急がされたり、警察から呼出されて「自動車に税金をかけるぞ」と脅かされたり、ジッと瞑目すると、子どもの国の周囲を取りまいてい

る大人の国からは、怪しくドス黒い雲が被いかかっています。  
(おわり)



「それぞれの子どもらしさを求めて」より (四)

名古屋市立大高幼稚園



ただいま本屋はおやすみ

なつおとかずおが本屋をはじめた。そこへしゅうぞうが、

「入れて」

とやってきた。

「だめ、せまいから入れない」

と、拒否している。しかし、しゅう

ぞうもあとになかなかひかず、

「どうしてだあ、そんなこといっていかんぞう」

「しゅうぞうちゃんなんか、ようやめた

あーって行って、あっちへ行ったり、こっ

ちへきたりしてばかりいるもん」

といいあっている。そういつているなつお自身も、そのような傾向があるのだが、やはり子ども同志の間でも、そういう子ども

の状態を、お互いによくつかみとっている

ということを感じた。

「よし、決闘だ」

とふたりでとつくみ合いをはじめたが、なかなか勝負がつかない。しばらくして気がすんだのか。

「じゃいいわ、だけどおふるには、一回しかはいつていかんよ」

と条件をつける。

「一回だけはいかん」

と、しゅうぞうが反発する。

「じゃ十回だよ」

ということで、双方納得し、ようやくしゅうぞうが、その場の中にはいることができた。屋根つきのふるを作り、本屋をするかたわらで、その中にもぐりこみ、かなり長い時間遊んでいた。ふるを作ったかずおはそれをあくまでもふるとしておきたいのにしゅうぞうは、そこを部屋にしてねるところにしたかったらしく、またそのことで意見が対立し、しゅうぞうはその仲間から抜け出していった。そのあとは、かずお・しんやを中心として、新しい顔ぶれが加わり



遊びがづづいていった。その中の一員に、入れてもらったなつおが、カメラを作ったことがきっかけとなって、その場の中の子どもは、全員製作コーナーでカメラを作りフィルムを入れて、写しまわっていた。はじめに遊んでいた本屋の店には、

「おやすみ」

の看板がかかげられていた。

◇ ◇

子どもたちが併行して、ちがった遊びをはじめるとき、いろいろ工夫するものだなと思った。

「カメラを作っているから、本屋はもうやめてしまったのだ」と教師はみてしまうことが多い。「おやすみ」の看板が示すように、子どもたちの意識は本屋にあり、その場を基点として遊びをひろげていくのである。カメラ作りが終ると、本屋がまた店をひらく。この過程は、遊びの指導をする上に、非常にたいせつなことではないだろう

か。また、子どもたちの会話の中から、子どもの世界のきびしき、楽しさを感じさせられ、遊びの指導のむづかしさを思った。

(四歳児 十二月二十日)

こまっちゃったわ

ふたりは、いっしょに登園してきたことがきっかけとなり、ままごとをやりはじめた。遊びはじめてそうそう、えみ子が、

「きみ子ちゃんね、わたしに赤ちゃんになれっていうんだよ。いやだもん」と教師に訴えてきた。きみ子は、自分のことを訴えに行つたのをみて、自分の考えをひっこめたらしく、やえ子やよしみも加えて、遊びを続けていた。しかし、しばらくすると、また四人がかたまつてすわりこみ

何かいいあっている。えみ子は、

「ごめんなさいしなきや、許してあげない」という。きみ子も、

「あんた、五歳のわたしにいばるき。」

などといいあっていたが、なかなかちがあかないようであった。どうなるのかと、しばらくようすを見ていると、えみ子が、

「バシー」ときみ子のほほをたたいた。

「なに、あんた」

と、きみ子もやりかえしたりしはじめたので、とめにはいった。

「えみ子ちゃん、手をだすのはやめなさい」とやえ子がいう。そのいい方が、日頃母親からいわれている調子そっくりで、おかしかった。

「どうして、けんかになっちゃったの？」

えい子もついていた紙のお金を、

「いけない。」

ときみ子がいったことがきっかけのようであった。

「先生どっちが悪いと思う？」

とやえ子がきくのので、

「どうしてけんかになったのかよくわからないから……やえ子ちゃんは どう思う

の？」と逆に問いかえしてみた。

「うーん、きみ子ちゃんが悪いというときみ子ちゃんが泣いちゃうし……」

と困った顔をする。えみ子ときみ子が、いあっているとき、やえ子とよしみは、

「わたしたち責任ないもんね」

と顔を見合わせ、かかわりはないという態度を示していたが、いつもいっしょに遊んでいる友だちとして、両方の気持ちを思いやるという、やさしい面があるのだなと思つた。教師とよしみとやえ子と話している間に気持ちがおさまったらしく、えみ子は「じゃいいわ、ここからわかれるんだよ」と、積み木で仕切りをつけて、ままごとコーナーをわけた。ふたりずつのグループになり、ときどき交流しながら、四人が遊ぶをつづけていった。

◇ ◇ ◇

子どものけんかに対しては、どちらがよいか悪いか結論を出すことを急がず、教師

も真剣な態度で、子どもたちの話の中に入ることが大切であると思つた。

(四歳児 一月二十一日)

### おひなさまとお話してたの

(その一)

よしみがひな壇の前でじっと立っている。教師がそばへいくと、

「おひなさまがお話しているのを聞いているの」という。教師が、

「どんなこと話したの？」

ときくと、

「よしみたちが、いなくなつてから、ひし餅たべるっていつてるよ」

それを聞いていたきみえが、

「あんたたち、うそいってはいかんよ。」

お人形はしゃべらんのだから」

と少し強い調子でいう。教師が、

「静かにしていると、ほら、何かお話ししてるのが聞こえてくるわ」

と聞こえてくるようなふりをする。

「聞こえてこないよ、そんなうそいっていかん」

といいはる。

◇ ◇ ◇

よしみのイメージはこわしたくないし、きみえのいうことも否定はできないし、こんなとき教師はどう子どもと対したらよいか困ってしまう。(四歳児 三月二日)

### おひなさまとお話してたの

(その二)

きのうにひきつづきよしみがやえ子といっしょに、ひな壇の前に立っているので、教師が、

「おひなさまとどんな話してたの？」

ときくと、よしみは、

「あのね、おひなさまとほんとうに話をしてたのにきみえちゃんうそだつていうの」という。教師がさらに、

「そう、よしみちゃんには、おひなさまの話がきこえたのね」というと

「ひし餅食べなさいっていったら、よる食べますっていったの」

とよしみがいう。するとやえ子が

「幼稚園の子どもは、みんなおりこうになりなさいっていったの」

とほんとうに聞こえたという気持ちで話してくれた。

◇ ◇ ◇

ひな壇の前のひし餅がよほど気にかかったのかもれないが、おひなさまとこんな楽しい会話ができる子どもはうらやましいと思った。毎年おひなさまをみるたびにこの会話が思い出されることだろう。

(四歳児 三月三日)

ぬってもいい?

母の日のプレゼントを、製作(エプロン

に好きな絵をかき)していないすみおが、製作コーナーのまわりをうろうろしているので、

「すみお君もやらない?」

と誘うと、いすをもってきて腰かけた。

そして、

「ぬってもいい?」

ときく。どうして、改めてきくのだろうか。

「クラスの子どもは、いろいろなものを、マジックインキでかいているのだけれど、

自分は、そういったものがうまくかけない。ただ色をぬるだけでもいいのか?」と

いうことをきいたのではないだろうか。すみおは、うまくかけないという劣等感をも

っているのだ、こういったことに取り組む

ことは、かなり苦痛であろうと思うのだが、

とにかくすみおが、やる気をみせてくれた

ことは、うれしく大切にしていきたい。

「いいんだよ、きれいにぬってあげてね」と声をかけると、ポケットのところは色を

かえ、一面にマジックインキでぬっていた。

◇ ◇ ◇

すみおにとっては、「かく」ということ

ばより、「ぬる」ということの方が負担

が軽く、スムーズに取り組んでいけるのだ

ということを思った。そして、何かをかか

なくても、こういうやり方でもいいのだと

いうことで、すみおはこのエプロン作りに

喜んで取り組めたのではないかと思う。

「かく」、「ぬる」同じようなことばでも

子どもによっては非常な違いを感じている

ということにおどろき、なにげなく使うこ

とばの、その中に持っている、意味の重要

さを考えさせられたのである。貴重な経験

であったと思う。(五歳児 五月九日)

わたしのプレゼント

みち子は、長い期間欠席していたので、

きょうお母さんのプレゼント作りをした。

エプロンを仕上げたあと、紙をもってきて

貼紙をはったり、絵をかいたりしていた。

「先生、お母さんありがとうございますかいて」というので、

「お母さんありがとうございますのね」ときくと、

「このふちに、お母さんありがとうございますかきましたってかくの」という。

「ありがとうございますじゃなくて、ましたなの？」

とききなおすと

「ありがとうございます」という。

◇ ◇ ◇

もう母の日がすんでしまったから、過去形になったのかどうかわからないが、おもしろいと思った。エプロンだけでなく、自分で考えて製作したものを、お母さんにプレゼントしようとする、この気持ちを大切にしたいと思う。みち子にとって、「エプ

ロンは、先生からお母さんへのプレゼントであって、自分からのプレゼントではない」と、思っているかもしれない。

(五歳児 五月十四日)

### 砂場は海

砂場で、ゆみ・たけお・まさこ・みつこが遊んでいた。教師が片付けであることを知らせにいくと、素足で遊んでいたたけおが教師のそばへやってきて、

「今度、うめぐみの子ども、みんなで貝ひろいに行くんだよ」という。

「お母さんといっしょ？」

「ううん、子どもだけ」

「子どもだけでは危ないからだめよ」

「だれかのお父さんか、お母さんがついていくの」

教師はお母さんたちの間で、貝ひろいに行くという、話し合いがあったのかと思っ

ていた。お弁当の時に、また、ゆみがその話の続きをしているので、

「お母さんたちが、そういう話をしてるの？」と聞く、

と聞く、

「ちがうよ、だけれどうちの車三台使えば、うめ組の子ども全部いけるよ」

という。よくよく話を聞いてみると、砂場を海にし、石を貝として遊んでいるうちにそれがいつの間にか、「みんなで貝ひろいにいこう」という話になったようである。

◇ ◇ ◇

友だちと遊んでいるうちに、一躍現実化の方向に話が進んでいく。子どもの世界の不思議さを改めて感じさせられた。今にもいきそうな、具体的な話なので驚いてしまったが、子どもたちだけに十分通ずる世界があり、イメージが豊かでない教師では、その中に入っていけない何かがあるような感じがした。

(五歳児 六月十一日)

# 幼児の教育 第七十四巻 総目録

## ◆ 一月

萩の露	千谷 七郎
幼稚園の保育内容における自由遊びの変遷(Ⅲ)	西本 脩
楽しく、かつきびしい教育学	—倉橋惣三先生にまなぶ—宮坂 広作
日本の保育とエ・エル・ハウ女史	高野 勝夫
幼児のお弁当	小林 トミ
心理療法と幼児教育のかかわり	佐藤 文子
落とし穴としての「発達に応じた指導」	南館 忠智
母と娘のヨーロッパ	河井多喜子
	祥子
◆ 二月	
灰神楽	申田 孫一
私の幼児教育論Ⅴ	神沢 良輔
幼稚園誕生百年を迎えて思うこと	きぎ手 周郷 博

雪・泡・焼物	山村 きよ
倉橋惣三選集第四巻より	前野 紀一
「幼児保育の芸術性」をめぐる	森田 宗一
幼児との出会い	川崎 千束
「自由遊びの指導」をめぐる	山道 陵子
	長山 篤子
洋書紹介	南館 忠智
出会い—その二—	江波 諄子
生命をかつぐって重いなあ	赤間 峰子
旅・発達(一)	福井 達雨
「家なき幼稚園と実態」より(八)	津守 真
◆ 三月	
思い出三つ	山田徳兵衛
心理学の観点から現代の幼児教育を	黒田 実郎
考える	佐賀 亦男
空を飛ぶ	

私の保育	菱川 敦子
七十歳でモンテッソリーに「出会った」	
偶然とその人間的背景を語る	鼓 常良
盲児とともに	周郷 博
子どもの生きがい	浅井 徳子
洋書紹介	塚田 幸子
「児童における人間性の研究」を読んで	江波 諄子
「幼児の文字指導!・?」はどう	島中 徳子
落ちついたのか	南館 忠智
旅・発達(二)	津守 真
動物園のおばさん記	赤間 峰子
あやまる教育を	福井 達雨
◆ 四月	
始まり	牛島 義友
ろくろ	外山滋比古
遊びをめぐる夢想(その一)	
—「始まり」を探る—	本田 和子
「始まり」をめぐる—人間の発達	
との関連で—	南館 忠智

「始まり」について  
田中 祐次  
気になる始まりと気づかぬ始まり

私の保育  
利島 保  
太田知恵子  
うるおい―倉橋惣三選集より―

菊地ふじの  
堀合 文子  
大多和 檀

心理学の立場から現代の幼児教育を  
黒田 実郎

考える (二)  
神沢 良輔

私の幼児教育論Ⅵ  
河辺 杲

―その一―  
津守 真

旅・発達 (三)  
「家なき幼稚園と主張  
より (九)  
福井 達雨

◆ 五月  
矢沢 宰

五月最後の日  
生活時間からみた親子関係―十二カ国の  
生活時間比較調査報告書から―

山室 周平  
心理学の立場から現代の幼児教育を

考える (三)  
黒田 実郎

私の幼児教育論Ⅷ  
神沢 良輔  
遊びをめぐる夢想 (その二)  
―「変身」の系譜―

はじめ  
本田 和子  
村田 修子

韓因幼稚園教育の発達  
李 相琴  
障害児と共に  
佐伯 幸雄

幼児の遊びに関する四つの断章  
南館 忠智

講演 幼児との教育について思うこと  
―その二―  
河辺 杲

こすもす保育園見学日誌  
竹田都志子  
赤ちゃんのおみそや  
福井 達雨

◆ 六月  
徳川 宗教  
周郷 博

対談  
「すばらしい子供たち」を撮影して  
田沼 武能

私の幼児教育論Ⅷ  
神沢 良輔

沖繩だより  
牧野 静子

外へ、外へ―倉橋惣三選集より―  
清水 光子  
柁田 正子

私の保育  
阿部 房子

幼児にとつての「自分」  
南館 忠智  
始まり  
山本 秀子

始まり  
早川満寿子  
はじめてのこと  
大橋利恵子

旅・発達(四)  
津守 真  
「こどもとリズム」を読んで  
山村 きよ

子ども側からのカリキュラム  
福井 達雨

◆ 七月  
幼児期における平和教育  
荘司 雅子

公立小学校普通学級に入学した五人の  
全盲児 (その一)  
小柳 恭治

遊びをめぐる夢想 (その三)  
―「まればと」の位置―  
本田 和子

うたのこころ  
浅野千鶴子

幼稚園真諦―倉橋惣三選集より―  
八坂 富子

高校生と保育―授業の中より―  
江波 諄子

講演 革新するアメリカの保育  
三好 美那

児玉 省

幼な児をはぐくむ自然

私の保育

「始まり」と「初め」

保育の心の初め

始まり

公平について

おい抜かされる喜び

◆ 八月

幼児期における平和教育(2)

別れについて

立ちどまる

室谷 幸吉

平野 信子

渡辺 祝子

中村美智子

赤間 峰子

津守 真

福井 達雨

荘司 雅子

谷川俊太郎

外山滋比古

遠藤 悟朗

守永 英子

幼児教育に「ゆとり」と「ゆめ」と

「ゆたかさ」を

私の幼児教育論Ⅹ

太平洋の先駆者―海と船にちなんで―

寺井 久美

ある木曜日―高校生と保育園の子ども―

斎藤みちよ

秋山 達子

服部 公一

失われた立ちどまるムダ  
立ちどまる

「それぞれの子どもらしさを  
求めて」より(二)

倉橋惣三先生の思い出

―古いノートから―

「家なき幼稚園と実際」より(十)

二つの自分

◆ 九月

太鼓打ち

へ子どもの見かたの意義

私の幼児教育論Ⅹ

問題児の幼児期

―登校拒否児を中心に―

たちどまる

たちどまる

たちどまる

さあ幼稚園よ

私の保育のはじまり―あたらしく入って

来た子どもたちをめぐって―

利島 保

宮川 せい

島沢 良子

赤間 峰子

津守 真

木島 始

鬼丸 吉弘

神沢 良輔

篠崎 忠男

芝 恭子

伊豆山明子

依田満寿美

石川 章子

西本 美節

二学期を迎える新入園児について思う

私に

私の保育

ある日のできごとから

うっかり笑って

倉橋先生と共に

私の保育

私に

私にとつての保育のはじまり―子どもた  
ちの動きに一時代の音楽を期待する―

私の保育のはじまり―あたらしく入った  
子どもをめぐって―

岡先生とおはなしえほん

―岡 政先生を悼む―

マリアさんを再びお迎えして

◆ 十月

おとなの繰りごと―幼時と音楽―

幼児教育に「ゆとり」と「ゆめ」と

「ゆたかさ」を

私の幼児教育論Ⅺ

保育における子どもの「自由」

うっかりしている時―倉橋惣三選集より

ある日のできごとから

倉橋先生と共に

私の保育

私に

私に

私に

私に

私に

私に

私に

私に

松沢 孝博

小野真理子

神 礼子

後藤 千枝

赤間 峰子

利根川 裕

松隈 玲子

神沢 良輔

大場 牧夫

西野紀代子

光木 美子

田坂 ユキ

村石 京子

私に

私に

私に

私に

私に

私に

私に

私に

私に

私に

講演 母なる大地を求めて 周郷 博  
周郷先生の講演をきいて

さかたのぶこ

お誕生会

倉橋賞を受賞して

蕪木 寿江  
利島 保

「家なき幼稚園の主張」より(十二)

「それぞれの子どもらしさを求めて」より(二)

◆ 十一月

くりかえし

私の絵本

牛島 義友  
瀬名 恵子

幼児教育に「ゆとり」と「ゆめ」と

「ゆたかさ」を

松隈 玲子

周郷先生の講演をきいて

てまり―ゆたすら「くり返す」ことの

意味

本田 和子

私の幼児教育論Ⅻ

講演 大事な小さいこと

神沢 良輔

私の保育

幼児の供述心理(その一)

くりかえし

堀合 文子  
近藤千恵子  
池田 義徳  
津守 房江

「それぞれの子どもらしさを求めて」より(三)

幼児の遊びに働く認知機能の条件分析

的研究(その一)

利島 保

ベルギーからの便り

赤間 峰子

「家なき幼稚園と実際」より(十二)

◆ 十二月

くりかえし

くりかえし

外山滋比古  
高木 良子

幼児教育に「ゆとり」と「ゆめ」と

「ゆたかさ」を

松隈 玲子

私の幼児教育論Ⅻ

神沢 良輔

くりかえし

講演 海辺の生物

森下 博三

自分への宿題

幼児の供述心理(その二)

酒井 恒

幼児の遊びに働く認知機能の条件分析

的研究(その二)

池田 義徳

最近の本から

「家なき幼稚園の主張」より(十三)

津守 真

「それぞれの子どもらしさを求めて」より(四)

第七十四巻総目録

幼児の教育 第七十四巻第十二号

十二月号 © 定価二〇〇円

昭和五十年十一月二十五日印刷

昭和五十年十二月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所 フレーベル館にお願いたします

\*万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。



豊かな保育の世界がここから始まる……



# ……保育カリキュラム資料……

〈全6巻〉

B5判・136頁 各800円



1 ……春

4 ……冬

2 ……夏

5 ……遊び

3 ……秋

6 ……小事典



51 年度



# フレーベル館の新学期用品

